



鳥取県羽合町

長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 II

寄贈

天神川流域下水道事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

1981

財団法人

鳥取県教育文化財団



正 誤 表

頁	行	誤	正
5	14	現状移転	現状移転
12	13	東伯耆地方	東伯耆地方
14	22	掘立柱建物	掘立柱建物跡
18	7	侵食	浸食
28	17	(i 1 ~ i 14)	(F 1 ~ F 14)
	20	(i 1)	(F 1)
	24	(i 2)	(F 2)
	27	(i 3)	(F 3)
	29	(i 4 ~ i 6)	(F 4 ~ F 6)
29	6	風・空輸18点	風・空輸15点
	6	水輪24点	水輪19点
	6	総数66点	総数58点
	16	柄穴	枘穴
	20	柄	枘
38	0	5 cm	2.5cm
47	6	五代思想	五大思想
	23	水輪5点	水輪10点
49	1	風・空輸i点	風・空輸4点
51	30	柄穴	枘穴
52	20	*	*
	20	柄	枘
	29	淡灰褐色粘質砂層の面で白砂に埋れた 白砂	淡灰褐色砂層(墨砂)に埋れた 墨砂
58	20	元弘帝著船跡	元弘帝着船處碑
60	13	旧奈利	旧名利
	15	御園御用係河村郡野方村長右衛門	御園御用掛河村郡野方邑長右衛門
68	15	施されています。	施されています。
	29	*	*
70	16	鉄芯	削除
	17		鉄芯
86	2	外面たてへら磨き。	外側たてへら磨き。
99	J i		J 1
35	C i		C 1

頁	行	誤	正				
		石番号	塔 形	備 考	石番号	塔 形	備 考
100	26	S 24	水 輪		S 24	水 輪	11D SEG
	30	S 27	*	のみの跡が残る	S 27	*	のみの跡が残る
	35	S 32	*	*	S 32	*	12E SEG
	37	S 34	*	*	S 34	*	13E NEG
101	9	S 42	*		S 42	*	13E SEG
	18	S 51	風空輪		S 51	風空輪	11D SWG
	20	S 53	*		S 53	*	12E NEG
	30	S 63	*		S 63	*	12A SEG
説明 8-8 犬 地 逆							
	10-3	*					
	22-S 68	*					



上 五輪塔群出土狀況 下 一号墳全景

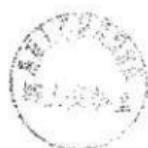
序 文

昭和52年8月から開始された当財団の長瀬高浜遺跡発掘調査は、5年目をむかえますます新事実があらわれてきている。これらの考古学上の知見は、その一部を既に概報としているところであるが、本報告は、その質・量の多さから今日まで延びのびになっていた。ようやくここに昭和53年度の発掘調査の結果をまとめて「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅱ」としておくりする。北条砂丘の下に眠る数多くの遺構や遺物の検出によって、現在では予想もできない古代村落が営まれていたことが判明した。これらの多くの事実から、古代の日本海岸や周辺の地形、あるいは古代人の生活等が順次解明されていくものと期待したい。この報告書がその端緒となれば、発掘調査を受託した鳥取県教育文化財団の望外の喜びである。

終りに、この調査を実施するにあたり、事業主体の鳥取県土木部下水道課をはじめとして、倉吉土木出張所下水道課、日本下水道事業団天神工事事務所から多大の御協力を、また県教育委員会文化課、羽合町教育委員会からていねいな御指導をいただいた。ここにその御好意に対して心から感謝の意を捧げる次第である。

昭和56年3月

財團法人鳥取県教育文化財団 常務理事 平木安市



例　　言

本書は、天神川流域下水道事業にともなう埋蔵文化財発掘調査の昭和53年度緊急調査地区の報告書である。

財団法人鳥取県教育文化財団が、県土木部下水道課の依頼をうけて発掘調査を実施したものである。発掘及び整理・報告書作成作業の実施にあたっては、鳥取県教育委員会文化課の指導と、各研究機関・大学等の考古・人類・自然科学等の専門家の助言・協力を得た。

本書の作成については、教育文化財団中部埋蔵文化財調査事務所で、昭和55年度調査員が行い、上記の専門家の方々と、昭和53年度調査関係者の方々の指導・助言・協力をえた。記して感謝の意を表します。

調　　査　　指　　導	山　本　　清	鳥取県文化財保護審議会委員
佐々木	謙	同上
手　嶋　義　之		同上
豊　島　吉　則		鳥取大学教育学部教授
赤　木　三　郎		同上
53年　度　調　　査　　員	森　田　純　一	県教委文化課
田　中　秀　明		同上
田　中　精　夫		同上
久　保　穰二朗		県立博物館学芸員

本書に使用した方位は、すべて真北をさす。

長瀬高浜遺跡の報告書は、昭和54年度発刊の北条バイパス調査区の『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅰ』がある。今後の報告書発刊の予定は次のとおりである。

長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ	一昭和54年度調査地区	昭和56年9月	予定
長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ	一昭和55年度調査地区	昭和57年3月	予定
長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ	一昭和56年度調査地区	昭和57年9月	予定
長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅵ	一昭和57年度調査地区	昭和58年3月	予定

目 次

序文

例言

目次

挿図・図版目次

第Ⅰ章 長瀬高浜遺跡の調査経過	1
第1節 発掘調査までの経過	1
第2節 遺跡の発見	1
第3節 試掘調査（昭和52年次）	1
第4節 昭和53年度本調査	2
第5節 発掘調査日誌	3
第Ⅱ章 羽合町の歴史	11
第Ⅲ章 長瀬高浜遺跡の概要	14
第Ⅳ章 発掘調査の結果	17
第1節 概観	17
第2節 遺構について	18
(1) 石蓋土壙	18
(2) 石桿状遺構	18
(3) 溝状遺構	19
(4) 五輪塔群	20
第3節 遺物について	24
(1) 縄文土器	24
(2) 弥生土器	24
A 前期の土器	24
B 中期の土器	24
(3) 土師器	25
A 古墳時代前・中期	25
B 古墳時代後期以降	25
(4) 須恵器	26
A Ⅱの1・2期	26
B Ⅱの3・4期	26
C Ⅱの5・6期	27

D	Ⅲの1・2期	27
E	Ⅳ期	27
F	Ⅴ期	27
G	その他の須恵器	27
(5)	縹釉陶器	27
(6)	埴輪	27
A	朝顔型埴輪	27
B	円筒埴輪	27
(7)	かまど・獸形支脚	28
(8)	管玉	28
(9)	古錢	28
(10)	鉄製品	28
A	釣針	28
B	鋤	28
C	楔	28
D	鉄釘	28
(11)	紡錘車	29
(12)	五輪塔	29
A	地輪	29
B	水輪	29
C	火輪	29
D	風・空輪	29
第V章 研究ノート		47
第1節	長瀬高浜遺跡出土の五輪塔について	47
第2節	幕末における名和公顯彰碑と伯耆国野方の石工について	55
第3節	鳥取県の弥生時代前期の遺跡とその立地について	62
第4節	長瀬高浜遺跡出土の紡錘車	67
第5節	(1) 長瀬高浜遺跡出土土器の材質	71
	(2) 大柄遺跡出土土器の材質	75
第6節	長瀬高浜遺跡出土の庄内式土器の胎土分析について	79
第VI章	まとめ	82
関係者名簿		83
図録	—緊急調査地区出土遺物—	85

挿図・図版目次

挿 図

1.	長瀬高浜遺跡調査位置図	8
2.	長瀬高浜遺跡黒砂分布図	10
3.	長瀬高浜遺跡と周辺遺跡	13
4.	石蓋土壙	18
5.	石蓋土壙出土遺物	18
6.	石桶状遺構出土遺物	19
7.	石桶状遺構	19
8.	溝状遺構出土遺物	20
9.	溝状遺構	20
10.	緊急調査地区平・断面図	21
11.	緊急調査地区断面の拡大図	22
12.	五輪塔群	23
13.	土器実測図1	30
14.	" 2	31
15.	" 3	32
16.	" 4	33
17.	" 5	34
18.	" 6	35
19.	" 7	36
20.	" 8	37
21.	鉄製品・紡錘車・管玉・実測図、古錢拓本	38
22.	五輪塔実測図1	39
23.	" 2	40
24.	" 3	41
25.	" 4	42
26.	" 5	43
27.	" 6	44
28.	" 7	45
29.	" 8	46
30.	緊急調査地区外五輪塔実測図	48

31. 五輪塔各輪の計数測定図	49
32. 地輪相関図	50
33. 水輪相関図	50
34. 火輪相関図	51
35. 風・空輪相関図	51
36. 長瀬高浜遺跡五輪塔復元図	52
37. 鳥取県下の主な弥生時代前期の遺跡	66
38. 長瀬高浜遺跡出土の紡錘車	67
39. 糸の紡ぎ方	70
40. 長瀬高浜遺跡出土土器の規格化値 [K]—[Ca] の 2 次元分布図	73
41. 長瀬高浜遺跡出土土器の規格化値 [Rb]—[Sr] の 2 次元分布図	73
42. 長瀬高浜遺跡出土土器胎土含有成分のパターン図	74
43. 大柄遺跡出土土器の規格化値 [K]—[Ca] の 2 次元分布図	77
44. 大柄遺跡出土土器の規格化値 [Rb]—[Sr] の 2 次元分布図	77
45. 大柄遺跡出土土器胎土含有成分のパターン図	78
46-1 庄内式土器の蛍光 X 線図	80
46-2 庄内式土器の蛍光 X 線図	81

写 真

1. 試掘調査	2
2. 黒砂層検出中	2
3. 1号墳全景	3
4. 長瀬高浜遺跡航空写真	13
5. 住居跡群	16
6. 墳輪群	16
7. 緊急調査地区全景（南から）	17
8. のり面の断面（西から）	17
9. 石蓋土壙（南から）	18
10. 石蓋土壙出土遺物	18
11. 石櫛状遺構出土遺物	19
12. 石櫛状遺構（南から）	19
13. 溝状遺構（南から）	19
14. 溝状遺構出土遺物	20
15. 五輪塔群（東から）	20

16. 大日寺五輪塔群	47
17. 大日寺五輪塔	47
18. 赤坂五輪塔	47
19. 下甲五輪塔	53
20. 向陽寺五輪塔群	53
21. 下市五輪塔	54
22. 助沢五輪塔	54
23. 大蓮寺五輪塔	54
24. 故伯耆守名和君碑、表	57
25. 故伯耆守名和君碑、裏	58
26. 氏歿権現道	60
27. 長瀬高浜遺跡出土の紡錘車	68

表

1. 長瀬高浜遺跡遺構表	16
2. 県下の主な弥生時代前期の遺跡地名表	62
3. 長瀬高浜遺跡出土の紡錘車一覧表	69
4. 鳥取県下の紡錘車	70
5. 長瀬高浜遺跡出土土器胎土の蛍光X線分析値	72
6. 大柄遺跡出土土器胎土の蛍光X線分析値	76
7. 長瀬高浜遺跡出土の庄内式土器の胎土分析表	79

図 版

調査風景、五輪塔供養	図版 1
撚文土器（晩期）・弥生土器（前期）	〃 2
弥生前期・中期	〃 3
古墳時代（前・中期）	〃 4
土師器、甕	〃 5
土師器、甕	〃 6
土師器、杯	〃 7
土師質土器・須恵器（蓋杯）	〃 8
須恵器、鉄製品	〃 9
紡錘車、古錢、綠釉陶器、管玉	〃 10
五輪塔、地輪	〃 11
〃 〃	〃 12

五輪塔、地輪	圖版13
"、水輪	" 14
"、"	" 15
"、"	" 16
"、"	" 17
"、水輪・火輪	" 18
"、風・空輪	" 19
"、"	" 20
"、"	" 21
"、水輪・火輪	" 22
"、火輪・風・空輪	" 23

第Ⅰ章 長瀬高浜遺跡の調査経過

第1節 発掘調査までの経過

- 昭和47年 天神川流域別下水道整備総合計画策定。
- 48年 天神川流域下水道整備総合計画申請。
- 49年 都市計画地方審議会諮詢。
- 49年 計画決定告示。
- 49年 事業認可。
- 49年5月 長瀬高浜遺跡（長瀬遺跡）の発見。
- 49年7月 天神川流域下水道関係部課長会議。
- 50年 用地買収。
- 52年6月 県土木部下水道課と県教委文化課埋蔵文化財についての協議。
- 52年7月 県教委、下水道課長へ開発事業計画と文化財保護について通知。
- 52年8月 県知事埋蔵文化財発掘について通知（法第57条の3）。
- 52年8月 教育文化財団理事長、埋蔵文化財発掘調査届提出（法第57条）。
- 53年5月 教育文化財団理事長、埋蔵文化財発掘調査届提出（法第57条）。
- 53年8月 日本下水道事業団へ工事発注。

第2節 遺跡の発見

昭和49年5月7日県教育委員会文化課が一般国道9号線改築工事（北条バイパス）建設計画に伴い、現地踏査を実施したところ北条砂丘の東端部、鳥取県東伯郡羽合町長瀬字高浜・浜根荒神他、通称「高浜」一帯の砂丘畑地に弥生土器、土師器等が濃密に散布していたのでこの遺跡発見のきっかけとなった。踏査時、北条バイパス建設予定地の南に接して天神川流域下水道処理場建設計画のあることを知り、その一帯にも広く遺跡散布地が及ぶことがわかった。

第3節 試掘調査（昭和52年次）

遺跡発見以降、再三にわたり県教育委員会文化課と県土木部下水道課の協議が始まった。その結果、昭和52年8月から遺跡の性格の追及とその範囲を把握し、工事との調整を図るため、遺物散布地を試掘することにより砂丘遺跡の確認調査を実施することになった。

調査は、財団法人鳥取県教育文化財団（理事長知事）が行ない、経費は県土木部の委託費によった。調査対象地は、施設用地10haのうち第1期工事予定地で工事により埋蔵文化

財に直接影響を及ぼすと考えられる約5haとした。調査方法は、グリッド方法により、 $5\text{m} \times 5\text{m}$ ・ $5\text{m} \times 10\text{m}$ ・ $10\text{m} \times 10\text{m}$ とし計32か所約 $3,000\text{m}^2$ の試掘を行なった。その結果、この砂丘遺跡でも遺物包含層は砂丘活動の停滞期によって形成された黒砂層（黒褐色腐植砂層）と密接な関連があることをつきとめた。黒砂層は、浅いところで現地表面から10数cm、深いところは数mのところにあり、少量の黒砂面でも必ず土器片を含んでいた。砂丘地であるため、試掘表面は 100m^2 でも7mも掘り下げれば底面積は 1m^2 程度となってしまった。試掘には、検土杖・ハンドオーガーポーリングも使用した。地下深く掘り下げた場合には重機（ユンボ）の併用も行った。

試掘（約 $3,000\text{m}^2$ ）及び一部拡幅調査（約 $1,500\text{m}^2$ ）の調査を行った。その結果、砂丘下に円墳1基、箱式石棺6基、中世火葬墓25基を検出した。また、出土遺物は、多量の弥生土器・土師器であり、中では壺・甕・高杯が主であったが、石斧・石鎌・砥石・土錘・紡錘車などの生活用具も含まれ遺跡との関連を暗示した。

（昭和52年度試掘調査費委託料 11,830,000円）



写真1 試掘調査

第4節 昭和53年度本調査

試掘調査結果に基づき関係部局と協議の結果、下水処理場建設設計画・施設配置計画の変更は不可能という結論のため、調査員を増強して全面発掘調査を教育文化財団が実施することとなった。そして、調査は次の4点を中心に行うこととした。

(1) 黒砂分布範囲を明確にし、上層の灰白色砂を除去すること
10数mに及ぶ灰白色的砂丘砂除去から始まった。そのためには、調査の一環として事業課に $50,000\text{m}^3$ の砂除去を依頼し、そのあと起伏する黒砂面を露出するため、ベルトコンベアーより灰白色砂の排除を始めた。その結果 $18,000\text{m}^3$ の黒砂面を検出した。大きく起伏する黒砂面をよく観察すると、わずかな起伏に気づきこれ

も古墳と考えるに至り、11基の追加と



写真2 黒砂層検出中

なった。黒砂面は、今後増々拡大して行くものと推定される。

(2) 1号墳とその周辺の発掘調査

砂丘にすっぽり埋り全く姿を見ることができなかつた1号墳が、径33m・高さ2mにも及ぶ大円墳として確認された。

工事の関係と長瀬高浜遺跡の調査の手がかりをつかむためにも、まず、1号墳の発掘にとりかかった。その結果、墳丘の

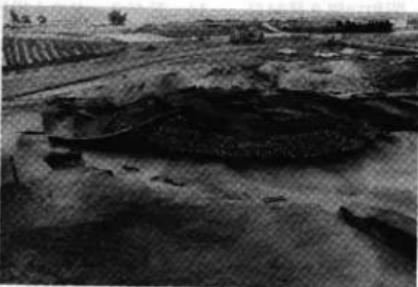


写真3 1号墳全景

全貌を出す上層部調査過程で中世火葬墓群48基、周溝部とその周辺調査で箱式石棺等14基が確認され、墳丘築成状況調査では竪穴住居状遺構の調査へと発展し複雑化したため、1号墳のみでなく調査地区の拡大も余儀なくされるに至つた。

(3) 東部黒砂地区の発掘調査

13E、13Fを主に古墳以外の黒砂層内の遺構状況を把握し、今後の調査計画の基礎にしようと試みた。竪穴住居状遺構2、火葬墓4、黒砂と灰白色砂の境界付近で合口土器棺墓1、灰白色砂中で屈葬人骨1を検出した。しかし、年度内に黒砂下層まで調査を進めることができず課題を残した。

(4) 中央管理棟建設工事中の発見に伴う発掘調査

昭和53年10月25日、中央管理棟建設工事掘削作業中、南の13A標高3m付近で黒砂が露していることを発見、直ちに工事を中断し緊急調査に入った。

当初この地区の黒砂は、試掘調査では確認できず(調査前の標高15~17m)、E-Dより南は風蝕作用等で消滅したものと考えていた。この調査の五輪塔群の出土により黒砂が傾斜して歴史時代まで続き、それ以降10数mの砂が被覆した等の知見も得られた。

(昭和53年度発掘調査費委託料 41,000,000円)

第5節 発掘調査日誌

昭和49年5月7日 北条バイパス及び下水処理場予定地区の長瀬地区で、分布調査の結果土器の散布を認める。長瀬遺跡と名称し、後に長瀬高浜遺跡と改称する。

それ以後文化財保存の為の再三の協議を経て、遺跡の確認調査を実施することになった。

昭和52年7月25日 発掘開始に伴う事前打合せ会。現地にて区画設定のための杭打。

8月29日 調査区域内の試掘にとりかかる。20-Dグリッドで黒砂を検出する。

9月5日 19-Dグリッドでも箱式石棺検出。(地表下約2m30cm)

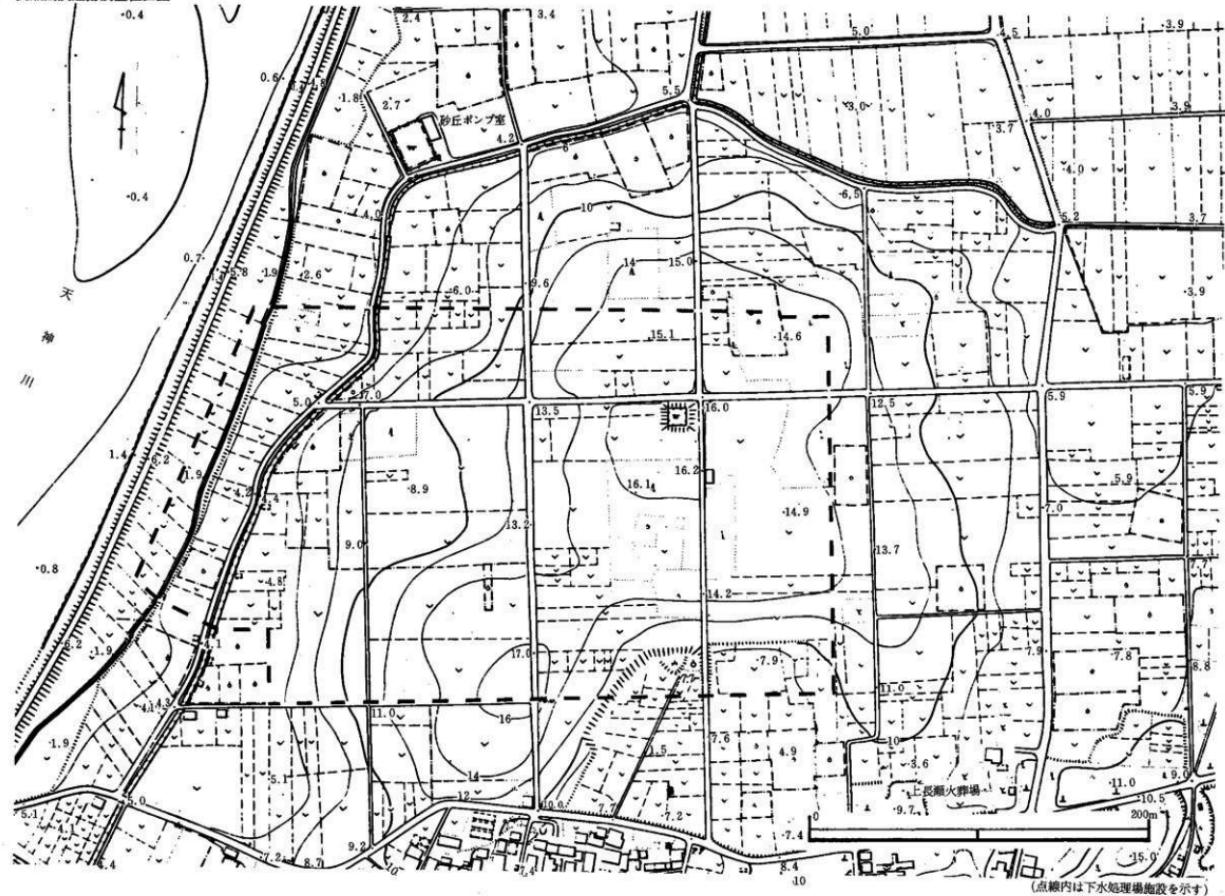
9月19日 13-Dグリッドでも黒砂検出。

- 昭和52年 9月24日 14-E グリッドでも黒砂検出。
- 10月 7日 23ヶ所の遺構確認のための調査終了。8ヶ所のグリッドで黒砂検出。
- 10月 8日 黒砂を検出した20-D グリッド周辺を拡張。
- 10月13日 20-E グリッド内の黒砂中で完形の土師器壺検出。
- 10月17日 19-E の表砂中で土鈴発見。
- 10月29日 20-E グリッド内で石棺検出。V字枕周辺に骨片・歯片群検出（後に45号石棺と名称する）
- 11月 5日 19-D で火葬墓検出。骨片等散乱。銅錢 1枚（開元通宝）発見。
- 11月 9日 19-E で石棺検出。石棺上層の黒砂中で完形の土師器広口壺検出。
- 11月10日 19-D グリッド西側で列石群検出。後に1号墳の葺石と判明。
- 11月21日 火葬墓・葺石・20-E 墓群の実測開始。
- 11月27日 遺跡調査と併行して地層調査のための掘削開始。
- 12月 1日 古墳の中央部で検土杖により箱式石棺を確認する。
- 昭和53年 2月 7日 古墳周辺区のグリッドを拡大する。
- 3月17日 県文化財保護審議会委員遺跡視察。現地、役場にて調査説明会。
- 3月31日 地層調査のための掘削終了。長瀬高浜遺跡確認調査を一応終了する。
- 4月 1日 長瀬高浜遺跡発掘調査開始。18D・19Cなど1号墳周辺の白砂排除。
- 4月 3日 遺跡調査協議会を開く。（文化課、倉吉土木、羽合町、財団）今後の調査方法について協議する。
- 4月 4日 作業員の増強を行い1号墳の調査にかかる。
- 4月26日 1号墳北ベルト中にて有蓋高杯など完形須恵器群出土。
- 5月 2日 遺跡調査協議会を開く。Eラインより南側区域の作業の進め方について協議する（県下水道課、文化課、倉吉土木、羽合町、大島土建、財団）。
- 5月 8日 トレンチを1号墳北側に3本、東側に1本入れて周溝の調査実施。
- 6月 9日 1号墳北東側の周溝で供獻土器とみられる完形の土師器3点検出。
- 6月15日 12D内南側の黒砂層が消滅していく地点で屈葬人骨検出。
- 6月16日 京大理学部、池田次郎教授を招聘。43号石棺内で歯片検出。
- 6月21日 鳥取県文化財保護審議会委員佐々木謙氏調査指導。
- 6月23日 1号墳東側の42号石棺内でV字状石枕・頭骨・歯片など検出。
- 6月29日 1号墳東側の41号石棺内で歯片・土玉など検出。
- 7月14日 長瀬高浜遺跡の航空写真撮影。
- 7月15日 13D内の小型石棺調査。県教委埋蔵文化財講習会受講者現地見学。
- 7月17日 13D内屈葬人骨調査。

- 昭和53年7月19日 17G内で荒掘作業中に弥生時代前期の合口土器棺検出。
- 7月21日 1号墳内埋葬施設の調査に入る。箱式石棺は丁寧な粘土の目張り。
- 7月22日 航空写真再度撮影。
- 7月25日 16F周辺で2号墳検出。
- 7月27日 1号墳内埋葬施設の蓋石をとりはずし、棺内を調査する。棺内で頭骨を朱塗りした保存の良い人骨1体と副葬品として直刀1本（小林行雄先生によるつづらさわまきの大刀）竹櫛1個・土師器高杯（枕）3個を検出。
- 7月31日 京大池田教授を招聘し、人骨の鑑定を依頼。
- 8月1日 第1回現地説明会を行う。
- 8月9日 1号墳西側の52号石棺で人骨・鉄鎌・直刀・劍出土。
- 8月30日 遺跡調査協議会を開く（下水道課、倉吉土木、日本下水道事業団、文化課、羽合町、財団）。
- 9月8日 1号墳の北側周溝内で埴輪円筒棺（53号棺）を検出。
- 9月12日 ウレタン樹脂を用いて石棺状火葬墓（S F39・S F44）の現状移転。
- 9月18日 17G内の合口土器棺の調査に取りかかり、歯・人骨・管玉41個検出。
- 9月19日 県文化財保護審議会委員手嶋・佐々木両委員調査指導。
- 9月21日 鳥取大学赤木・豊島両教授現地指導。
- 9月22日 中央管理棟建設工事（昭和53年度調査地区）第1期工事開始。
- 9月26日 遺跡調査協議会を開く（文化課、下水道事業団、倉吉土木、財団）。
- 10月2日 東部地区（昭和54年度主に調査した地区）調査開始。
- 10月3日 1号墳周辺石棺群の調査終了。
- 10月9日 1号墳全景写真撮影（内部立ち割り調査前）。
- 10月11日 1号墳内部調査開始。
- 10月25日 中央管理棟建設掘削工事中、14A付近標高4～6mのところで黒砂層検出。工事の一時中断を要請し調査に入る（この地区を緊急調査地区と呼ぶ）。
- 10月27日 中央管理棟建設工事区域内で重機等を併用して試掘調査を行ったところ、黒砂の範囲が17A杭近くまで広がっていることを確認する。そこで工事を一時全面中止し、トレチ・グリッドを10数ヶ所入れる。県教委文化課、下水道事業団、業者、倉吉土木等の関係諸機関と協議を行う。
- 10月30日 試掘調査の結果、管理棟敷地内西側の遺構は、室町時代の五輪塔を中心とした墓地群であることを確認。この地区だけ調査を11月2日まで行う。降雨続く。
- 11月12日 緊急調査地区東側の調査で弥生前期の土器片、古墳時代の須恵器、中世の土師質土器、陶器、古錢（貞觀永寶）、溝の遺構などを確認する。

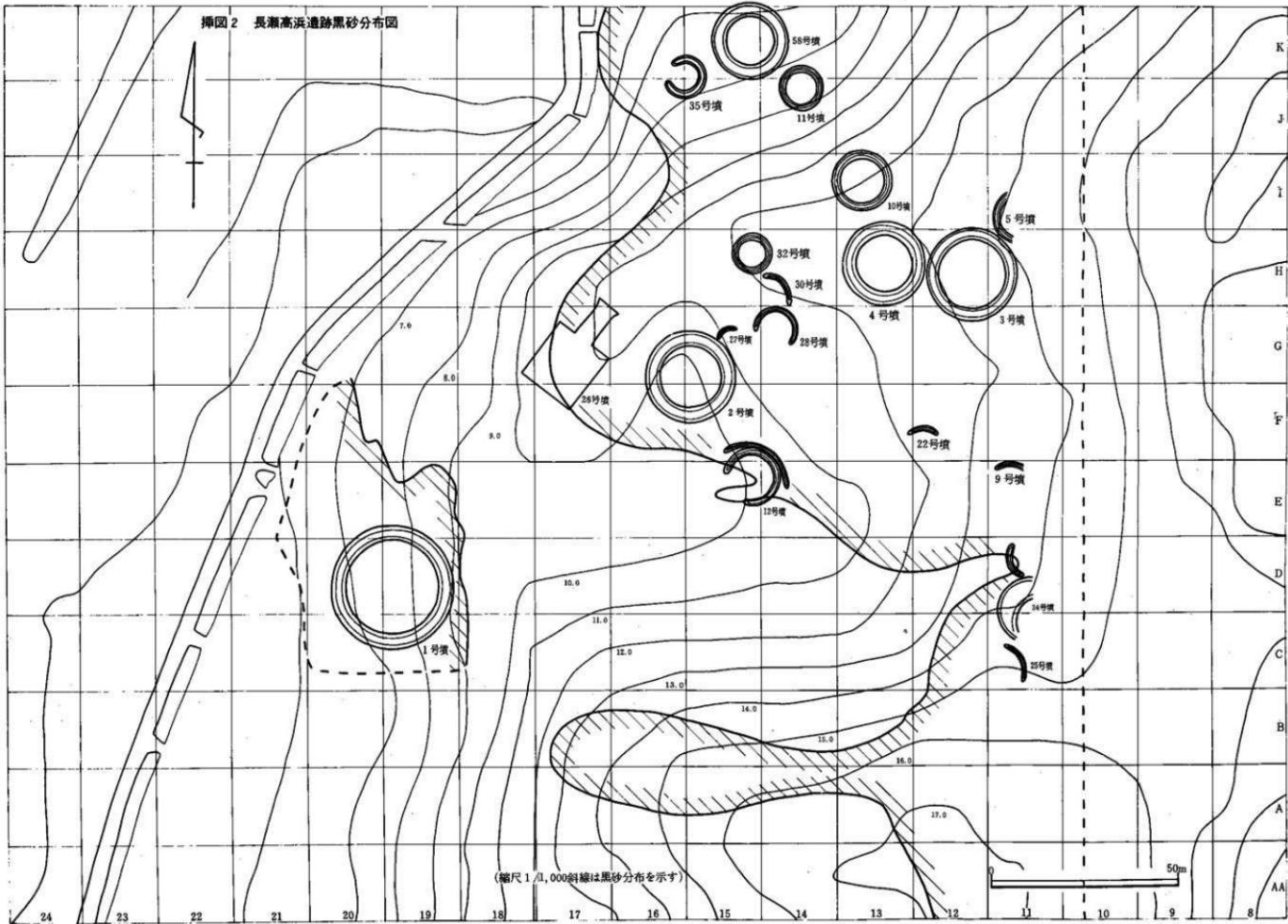
- 昭和53年11月13日 緊急調査地区東側全体の写真撮影を行う。中央管理棟建設工事区域内の緊急調査終了。
- 11月21日 遺跡調査協議会を開く（下水道課、文化課、倉吉土木、事業団、羽合町、財団）。
- 11月22日 墳丘D区で砥石・石製農工具等検出。13Eの黒砂上面で古銭（開元通宝・政和通宝）出土。
- 11月25日 13Eの仿製鏡（模文鏡）出土。
- 12月5日 13D・13E・13Gに5m四方のグリッドを入れ、掘り下げを行う。途中多量の土師器出土。
- 12月11日 奈良国立文化財研究所沢田正昭技官、1号墳石棺移転の為の調査指導に来られる。
- 12月20日 遺跡調査協議会を開く（文化課、下水道課、倉吉土木、事業団、財団）。
- 12月27日 1号墳周辺は火葬墓の骨を取り上げ、弥生前期土器群調査、葺石・土括群の調査、東部地区では20ヶ所のグリッドを入れ各々について遺物実測を行う。
- 昭和54年1月8日 東部地区11Eで箱式石棺一基を検出（後に9号墳と名称する）。
- 1月16日 1号墳調査終了。下層遺構の調査開始。12Fで銅鏡1本出土。
- 1月25日 県文化財保護審議会委員佐々木、手嶋両氏調査指導。豊島、赤木両教授現地調査。
- 1月30日 ベルコン作業の白砂排除中にH付近で古墳（3号墳）検出。
- 1月31日 遺跡調査協議会を開く（下水道課、倉吉土木、事業団、文化課、羽合町、財団）。1号墳南側の道路敷地について。
- 2月6日 県文化課文化財係全職員調査指導。
- 2月7日 県教育長・文化課長視察。
- 2月9日 羽合町教育長1号墳復元のための現地調査。
- 3月9日 東部地区における黒砂上面の地形測量開始。測量会社に委託。
- 3月18日～22日 京都大学・奈良国立文化財研究所・元興寺保存科学研究所へ人骨鑑定・銅器・鉄器保存処理を依頼する。
- 3月26日 遺跡調査協議会を開く（下水道課、倉吉土木、文化課、事業団、財団）。
- 3月31日 昭和53年度発掘調査終了。

図1 長瀬高浜遺跡調査位置図



(点線内は下水処理場施設を示す)

挿図2 長瀬高浜遺跡黒砂分布図



第Ⅱ章 羽合町の歴史

羽合町は、北を日本海・南を大平山・東を東郷池・西を天神川にかこまれた山陰の風光明媚な町の一つです。米作・梨・砂丘野菜や果樹の他、観光にも力がそがれています。

羽合町での人間の残した足跡をさぐると、旧石器時代～縄文時代まではほとんどその痕がみられません。わずかに旧天神橋北側の河床から縄文時代中～後期の土器片が採集されているにすぎません。また縄文時代晩期の後半で盛行する凸縁を持つ甕や鉢の小片が高浜遺跡からわずかに出土しています。旧石器～縄文時代は、人々は木の実を拾い、魚や獣をとる採集経済の時代でした。海は近いものの背後の山が浅い羽合町では、あまり多人数の人々が住める状況ではなかったと思われます。

これに対して水稻栽培が始まった弥生時代になると、平野部の多い羽合町にはたくさんの人々が住みはじめます。現在のところ、県下で最初に稻作りを始めたのは長瀬高浜遺跡だと思われます。家屋の数は少いものの墳墓が40数基もあり、それ以上の人々が高浜にムラを作ったと思われます。おそらく北九州に上陸した稻作文化を持った弥生人たちが、100年以上もかかって陸路を山陰に来たのではなく、北九州に上陸した人々が潮流（対馬暖流）にのってまもなく高浜付近に上陸し、鳥取県の稻作文化の中心的母集団を作ったものと考えられます。弥生時代中～後期には、高浜から東郷池周辺や大平山山麓の高台地帯に住居を移していくみたいです。そして小河川を単位とした地域集団を作っています。この弥生時代は生産性の高い稻作農業を行ったために、必然的に収穫量の多い集団と少ない集団、また蓄積量の大きい集団と小さい集団という差があらわれだします。収穫の多い集団はそれを蓄ええて力を強め、反対に少ない集団は多い集団に従属し支配下に入ります。こうして生れた集団の力の差が階級社会を作り出し、集団同志が対抗することによって勝った集団は敗けた集団を併合し小国家が生れ、その中から古代國家が生れます。これが弥生時代から古墳時代への動きです。

古墳時代になりますと、まず畿内で大型の前方後円墳が作られます。奈良県桜井市箸墓古墳・同茶臼山古墳・京都府椿井大塚山古墳などがそれです。と同時に、全国各地にもやや小型ながら前方後円墳が作られます。鳥取県で最初に作られた大型の前方後円墳の一つが橋津にある馬ノ山4号墳です。馬ノ山丘陵には24基の古墳が作られていますが、その中でも馬ノ山2号・4号墳はとりわけ大型で、古墳時代前期後半（4世紀後半）代の天神川下流域の首長墓と考えられます。いわば東伯耆の支配者の地位にあった人たちでしょう。そんな人々の墓が橋津にあることは、羽合町が古代の東伯耆地方の中でどういう地域であったかがうかがわれます。現在倉吉市は人口密集地区ですが、それは江戸時代に藩の役所がおかれた所であったためで、今は上井付近が国鉄倉吉駅の交通の便で開発が進んでいます。

となると古墳時代は羽合町がもっとも開けた場所であったのではないでしょか？

古墳時代中期には大型古墳はどこに作られるかといえば、東郷町宮内狐塚古墳・野花北山1号墳がこれにあたり、馬ノ山古墳群と同じく東郷池につき出た丘陵上に作られます。これは、東郷池が古代の交通路としてなくてはならぬ水上交通路であったことが大きな理由でしょう。現在の東郷町はもちろんのこと、東郷池に流れ込んでいた天神川を伝えれば北条町・倉吉市が、その支流の竹田川をのぼれば三朝町そして人形峠へ、小鴨川をのぼれば閑金町そして犬伏峠へ行くことができる古代の大幹線としてこのルートがあったとみられます。この水上交通路の海の出口が橋津川の河口、つまり馬ノ山古墳群の直下の橋津港であるわけです。だからこそ東郷池を支配する人が東伯耆の支配者たり得たと考えられるわけなのです。

古墳時代後期に入ると、律令体制下の国・郡・里制の基礎となるような小地域ごとに中規模の古墳及び古墳群があらわれ、以前のような大規模古墳は姿を消してゆきますが、羽合町の東伯地方での位置はそれによって大きく変化することなく続いたとみられます。奈良時代になると各郡単位で寺院が建立されだします。東郷池周辺では野方・久見地区に寺院が建立されます。舍人郷に位置しています。羽合町内（河村郷）には寺院は作られていません。これに対して式内社の伯耆一の宮である倭文神社が東郷池東岸に作られています。行政区からいえば舍人郷に入るかもしれません、地形的には河村郷に近く、また貞觀格の湊神社は河村郷ですし、伯耆二の宮である式内社波々伎社は隣の日下郷に属したと考えられます。新しい仏教支持勢力に対抗するかのように、旧勢力と思われる羽合町付近の豪族は神社の応援を行っていたのではないかとみられます。聖武朝を代表とする仏教の国家護持の風潮の中に、勢力的立場沈下をおこした大きな原因となったかもしれません。

中世に入ると、その大半は動乱期に入りますが、因幡地方では国府町にあった因幡國府がすたれ、六分一殿と称された山名一族が布勢天神山城に拠り湖山川一賀露港の水運を使って盛んに活動します。立地が等しい東郷池でも橋津川一橋津港の水運が盛んに使われたと思われます。鎌倉期の莊園絵図の1つである「伯耆国河村郡東郷荘下地中分図」(正嘉二年(1258年))によれば、日本海に大型の帆掛け船が浮び、橋津には大湊宮が描かれています。この絵図によれば、天神川は現在の国道9号線付近を北東に流れて橋津から日本海に出ており、天神川と大平山との間の三角洲は水田となっています。ほぼこの時期には天神川以外の現地形ができ上っていたものとみられます。

羽合町の原始～中世時代を概観してみましたが、スペースがないままに走りすぎたと思います。このような歴史の中でわたしたちの調査している長瀬高浜遺跡に生きた人々が、これらの歴史を作り上げた民衆の1人1人であったことはまちがいのない事実を考えます。

参考文献 羽合町史 谷田龜寿

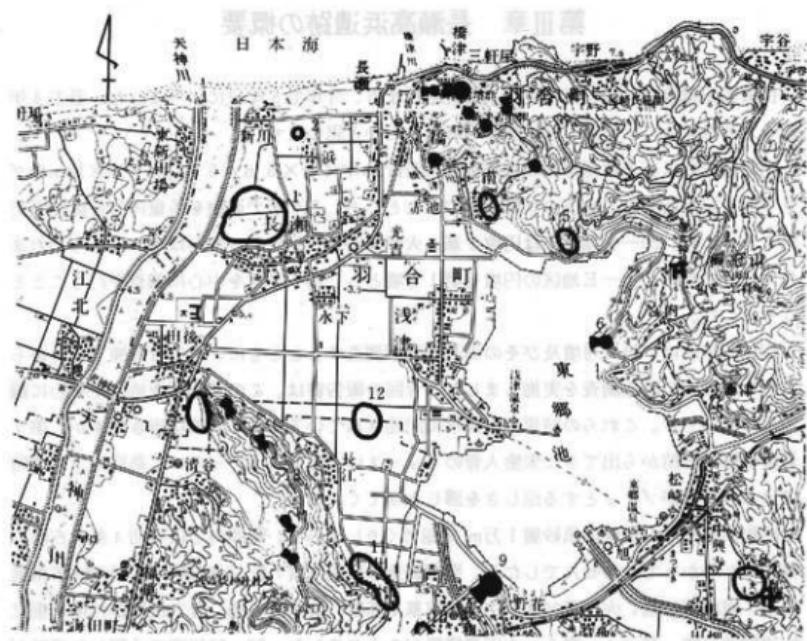


図3 長瀬高浜遺跡と周辺の遺跡

1 / 50,000

遺跡地名

1. 長瀬高浜遺跡
2. 和助北遺跡
3. 馬ノ山古墳群
4. 南谷遺跡
5. 乳母ケ谷遺跡
6. 宮内冢古墳
7. 傑文神社（伯耆一の宮経塚遺跡）
8. 久見廟寺
9. 北山1号墳
10. 長和田・津波遺跡
11. 門田遺跡
12. 開ヶ坪遺跡
13. 大平山古墳群
14. 溝口遺跡



写真4 長瀬高浜遺跡航空写真

第Ⅲ章 長瀬高浜遺跡の概要

長瀬高浜遺跡は、昭和52年夏から調査が始まり、今年で5年目に入りました。過去4年間をふりかえって、年次ごとに概要をみてみたいと思います。

昭和52年度は、下水処理場の調査範囲10万m²の中に5×5m・5×10m・10×10mのグリッドを24ヶ所入れ、地下の状態をさぐったところ、5ヶ所で遺物を多量に含む黒砂層が出てきました。20-E地区では円墳1基、火葬墓25基、石棺墓6基がはやくもあらわれました。この結果、20-E地区の円墳を第1号墳とし、第1号墳を中心に調査を行うこととなりました。

昭和53年度は、第1号墳及びその周辺を発掘調査するとともに、中央管理棟下からあらわれた黒砂層の緊急調査を実施しました。今回の報告書は、この緊急調査地区を中心に編集したものです。これらの結果は第Ⅳ章に記述されているために詳細は省きますが、第1号墳の箱式石棺から出てきた朱塗人骨のニュースは、猛暑にうだついた鳥取県下に瞬時ではありますがゾクッとする涼しさを感じさせてくれました。

昭和54年度は、東側の黒砂層1万m²を締めくりました。範囲内では当初4基の古墳の存在しかわからていませんでしたが、発掘調査の結果古墳7基、石棺墓7基、土壙・木棺墓9基、屈葬墓10基、火葬墓20基、中世陶棺墓1基等の墳墓群の他、竪穴住居跡75棟、掘立柱建物跡11棟、井戸4、溝5、水田遺構等がみられました。52・53年度で予想した遺跡が想像以上に大規模で質量ともにすごいことがわかり、古墳時代の一大村落と考えられるようになりました。

昭和55年度は、54年度の西及び北地区の調査を行いました。ここも当初古墳が2基わかっていただけでしたが、調査の結果古墳8基、石棺墓3基、木棺墓1基、円筒埴輪棺4基等の墳墓群の他、竪穴住居跡16棟、掘立柱建物7棟がみつかりました。

11月1ヶ月間は調査と工事との関係上、56年度調査区の第1号墳周辺に場所を移し、竪穴住居跡5棟、玉作工房跡と推定される場所1ヶ所、石棺墓2基、円筒埴輪棺2基、浜井戸（10年ぐらい前まで使われていた農業用水を得るための井戸）1ヶ所を調査しました。

また、12月から1月にかけて16K地区で多量の埴輪群が出土し、復元途中ですが甲冑埴輪3個体、家型埴輪5個体、盾型埴輪3個体、蓋埴輪9個体、柄埴輪1個体の他、朝顔型埴輪40個体以上、円筒埴輪10個体以上あったとみられます。

遺構そのものは祭祀関係の遺構かと考えられます。

これら現在まで検出した遺構は第1表のようになります。

さて、遺跡の存在基盤である黒砂層ですが、山陰海岸の砂丘地に点在し、それぞれに多量の遺物を包含していることがわかっています。分布については豊島吉則や赤木三郎らの

^{註1}研究があるのでそれにゆずりますが、長瀬高浜遺跡内については現在までの調査からわかった事実のみ記載しておきます。

まず、遺跡は厚さ1mの黒砂におおわれているが、北と西に行くにつれて薄くなり、北西側の高台では消滅します。これは風食作用によるとみられ、この地域で白砂に埋った竪穴住居跡を検出したこともあります。南側は標高5~6mで急に傾斜し、黒砂が2~3層にわかれますが、その下層には青灰色粘土層がみられ、弥生時代前期~古墳・奈良時代までの遺物を含む、数層の褐・白色砂の混合の上に灰白色砂層が厚く堆積しています。これらのことから、黒砂層は平坦面では弥生時代前期から室町時代頃まで大きな変化なく堆積していることがわかります。約2千年間に約1mの堆積は1年間にならすと0.5mmであり、単純な堆積と考えるならば草樹の落葉等の腐敗とみられます。「長瀬高浜遺跡Ⅱ」で書かれた3層の黒砂層の存在は、あくまでも斜面であり、平坦面にはこのような現象はみられません。これに対して傾斜面では、何層かの黒砂層がみられるることは確かです。ところが、層として続くというより、ブロック状、あるいはレンズ状に入り込むことが多く、傾斜面に上から落ちてくる黒砂、白砂等の複雑な堆積がみられることが多い。またそのような堆積砂中には、古い土器が混合して入りこむ例が多く、平坦面でさえ単純な弥生土器下層、土師器中層、陶器上層の層位関係はみられません。ゆえに豊島吉則の論にみられるような傾斜面での黒砂の時代的把握は、調査者の一人としては簡単に認めがたいところです。

赤木三郎の論によれば、弥生~奈良・平安期に海退期があると考えられ、現在よりも寒冷気候であったらしいです。長瀬高浜遺跡の竪穴住居は現在116棟に及びますが、そのほとんどに焼土面がみられません。まして火災家屋は皆無です。この点から考えて、寒冷気候地に火を容易に使用した痕跡のない竪穴住居群の意味をはかりかねますが、水田を持つ古代村落が繩文期と異なり簡単に季節移住するかどうか疑問が多く、今後の問題点としなければならないでしょう。が、海退が砂丘地に安定期を作り、黒砂の堆積があったと考えられる可能性はあるでしょう。このことから反対に、中世末の海進期に入って安定期がくずれ、現在の状況に変化したものかとみられます。

註1 「長瀬高浜遺跡の自然環境」「長瀬高浜遺跡Ⅱ」鳥取県教育文化財局 1979。

「長瀬高浜遺跡とその周辺の地質」「長瀬高浜遺跡Ⅱ」 同上

『県史Ⅰ・原始古代編』 鳥取県

	中央部	1号墳周辺	緊急調査	バイパス地区	合計
竪穴住居跡	101	9	0	6	116
獨立柱建物跡	21	0	0	5	26
井戸	5	0	0	0	5
溝	10	0	1	6	17
古墳	21	1	0	0	22
石棺墓	16	13	0	0	29
土壙・木棺墓	51	0	1	3	55
円筒埴輪棺	9	4	0	0	13
土器棺墓	2	0	0	0	2
方形周溝墓	1	0	0	0	1
五輪塔	8	0	66	0	74
火葬墓	10	47	0	0	57
祭祀跡	2	0	0	0	2

表1 長瀬高浜遺跡
の遺構表



写真5 住居跡群



写真6 墓輪群

第Ⅳ章 発掘調査の結果

アリヤニコ野原 調査報告書

調査報告書 (II)

第1節 概観

昭和52年度は遺物包含層検出のための試掘確認調査を行ったが、保安のため地表から 4 m 前後までしか掘り下げられませんでした。緊急調査地区では、およそ 10m の白砂がたまっていたので遺物包含層である黒砂の検出ができなかったわけです。だから中央管理棟建設場所であるこの地区は、他地区に先がけて工事を進行させてしまったのですが海拔 4 m 前後



写真7 緊急調査地区全景 (南から)

の地点で五輪塔群があらわれ、その下に黒砂を検出し、緊急調査を実施したわけです。

調査した主な遺構は、石蓋土壙、石柳状造構、溝状遺構そして五輪塔群です。

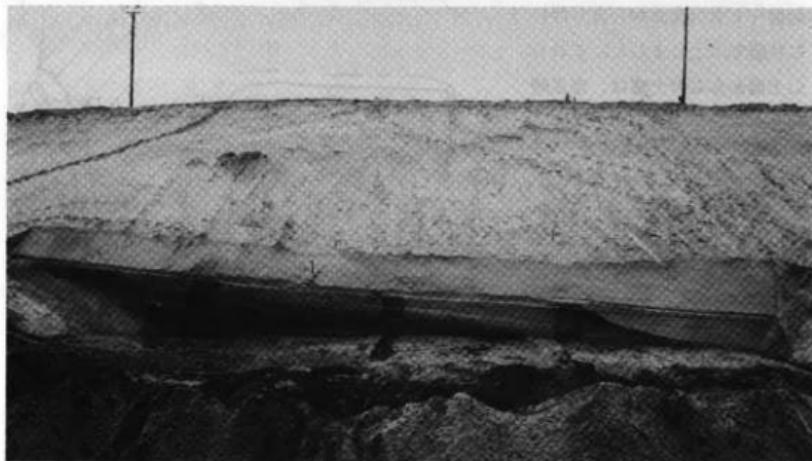


写真8 のり面の断面 (西から)

本アリヤニコ野原の調査報告書 第1章 概観

第2節 遺構について 索敵の査観歴 案内書

(1) 石蓋土壤

石蓋土壤は15B地区の北西にあり、黒砂境界線の北側の黄灰色砂中で検出しました。五輪塔群より10m北西、黒砂境界線より3m北にあります。石蓋土壤周辺に黒砂がありませんでしたが、これは重機によるものではなく、侵食によるものではないかと思われます。蓋は1枚の板石で、幅95cm×80cm・厚さ7cmの安山岩で扇形をしており、北東がやや高い状態で置かれています。土壤は蓋石の周囲（地山、黄灰色砂）に褐色砂の落ち込みとして認められ、蓋石と同じような形をしています。大きさは約

1m×1m、深さは5~6cmで底面は蓋石と同じように傾斜していました。遺物は土壤の中央やや南東で杯の破片1個と、他には土師器片2点が底面から少し浮いた状態で出土しました。これらの土器からこの土壤は、奈良時代から平安時代のものと考えられます。

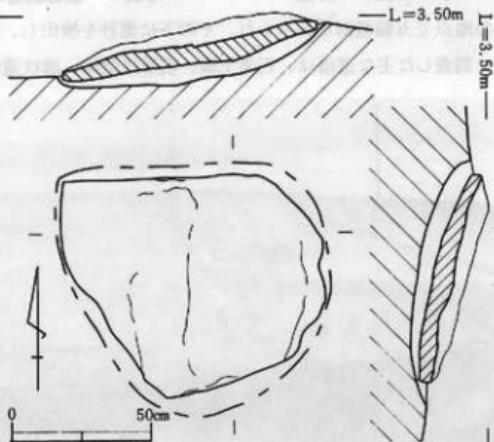
挿図5
PO232



写真10 石蓋土壤出土遺物



写真9 石蓋土壤（南から）



挿図4 石蓋土壤

(2) 石桿状造構

石桿状造構は12A地区の西側第A層から第B層にかけての層で検出しました。造構は10数枚の板石を組み合わせ中央を少しづばませて、南東隅に朝顔型の埴輪の一部が置いてありました。掘り方は60cm×50cmで浅く、板石は掘り方に密着していました。近くには造構

ではなく、55年度の調査でも同じ層位では遺構はありませんでした。この遺構はどのような性格のものか判断しかねますが、石槨内部が浅い事などから墓ではないと考えます。時期は、朝顔型埴輪を使用しているものの、埴輪表面が二次焼成の痕跡をわずかに残しており、埴輪の使用時期とは異なるとみられます。層位からみて奈良から平安時代の遺構かと思われます。



写真11 石槨状遺構出土遺物

挿図6
石槨状
遺構出
土遺物

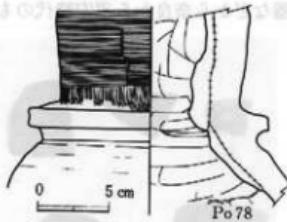
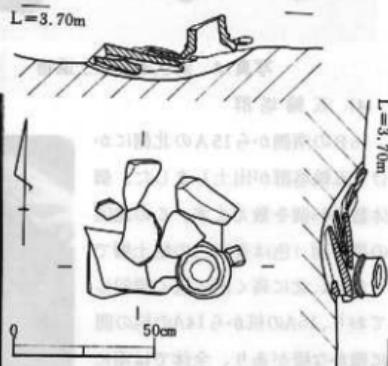


写真12 石槨状遺構 (南から)



挿図7 石槨状遺構

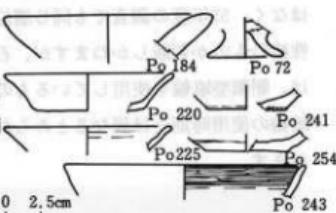
(3) 溝状遺構

13B地区の東側から12B地区にかけて東西に伸びる溝状遺構を検出しました。幅約50cm・深さ約40cmで、西側は重機により破壊されました。53年度の調査では長さ4m程しか調査できませんでしたが、54年度の調査でさらに8m東に伸びている事がわかりました。この溝は挿図11の第C層から掘り込まれています。断面はU字形をしており、底



写真13 溝状遺構 (南から)

は西の方がわずかに下っていました。溝の南側にはピットがありましたが、その中の1つは溝を切っており、溝より新しい時期のものだと思われます。溝状遺構内の遺物は土師器が7点ほど出土しました。時期は土師器などから奈良から平安時代のものと思われます。



插図8 溝状遺構出土遺物

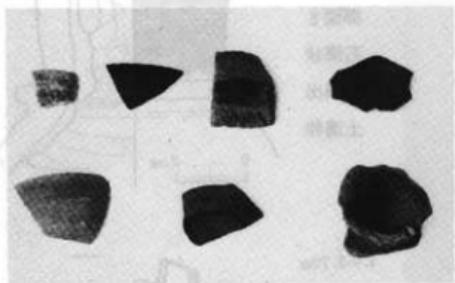
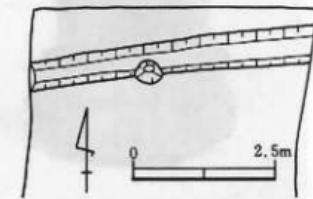


写真14 溝状遺構出土遺物



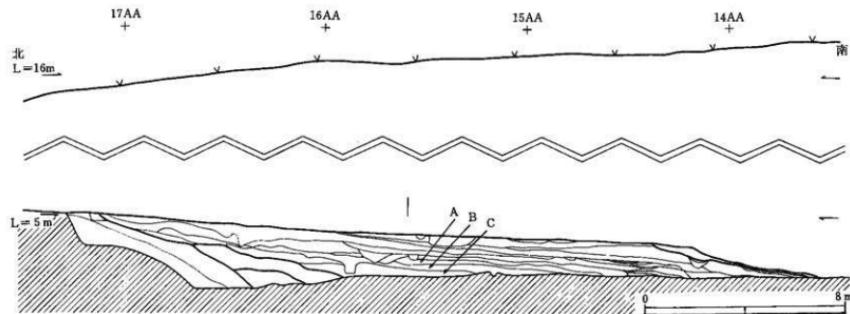
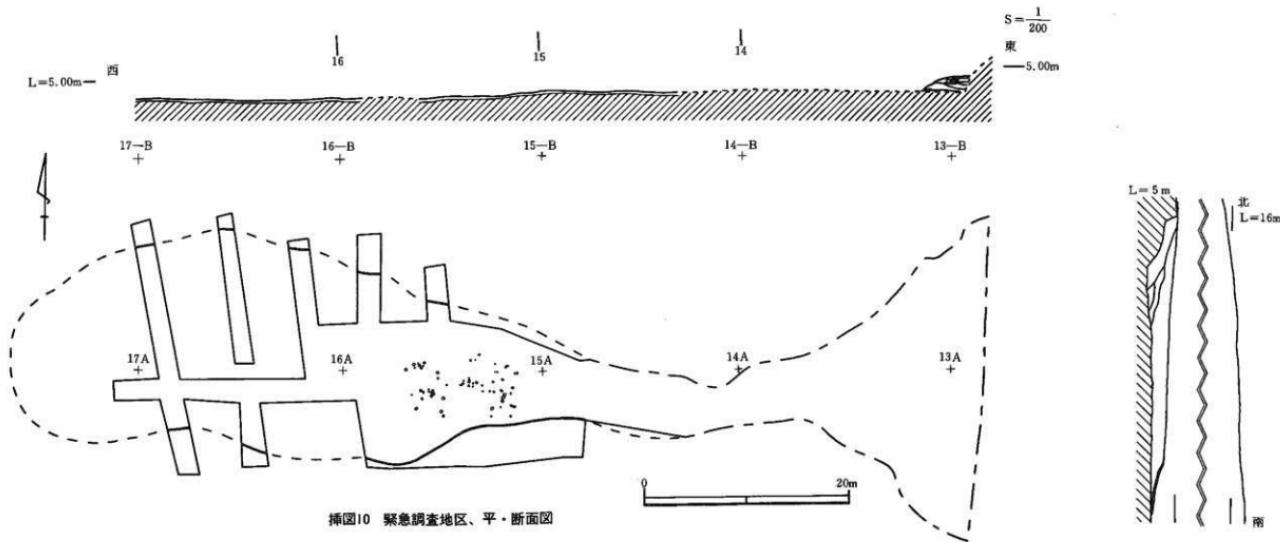
插図9 溝状遺構

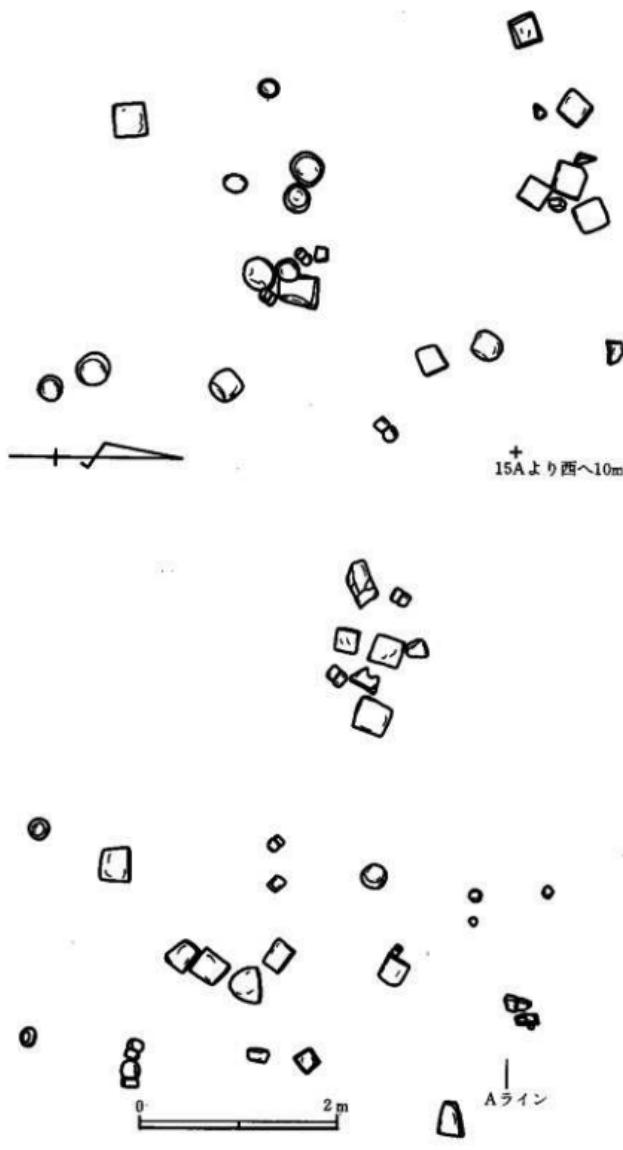
(4) 五輪塔群

15Bの南側から15Aの北側にかけて五輪塔群が出土しました。個体数は66個を数えます。この地区の黒砂面(色は青灰色の粘土層でした)は、北に高く南に低く傾斜しており、15Aの杭から14Aの杭の間に微かな稜があり、全体では南に傾斜していました。この五輪塔群の8m北側は黒砂が消えており南側は地下水水面下に没していました。五輪塔はこのような地形の南斜面上に散乱した状態で検出しました。検出した五輪塔のはほとんどは黒砂面に半分没した状態のもので、五輪塔が出土した場所は限られており、この付近に立っていたものが倒れたものと思われます。

写真15 五輪塔群(東から)







挿図12 五輪塔群

第3節 遺物について

工事中の緊急発掘であったため確実に遺構に伴う遺物は少ないが繩文土器・弥生土器・土師器・須恵器・縄釉陶器・埴輪・鉄製品・玉及び古錢・五輪塔がみられます。遺物の大半は古墳時代から奈良・平安時代までのものと思われ、土師器甕・杯などが目立って出土しています。次にそれぞれについて概要を記してみます。

(1) 繩文土器 (P O 1)

1はいわゆる「粗成刻み目突帯文土器」と称せられるもので、厚さ6mmを測ります。復元口径は34cmで口唇に幅1.5cmの断面三角形の貼り付け突帯がみられ、ヘラ状工具による刻み目が縦方向にほぼ均等に施されています。成形は輪積みで、色調は暗褐色、内面はすり消条痕、外面は条痕又は擦痕がみられます。

(2) 弥生土器 (P O 2 ~ P O 47)

甕の口縁・底部、壺の口縁・底部、器台などがあり前期・中期にかけてのものと考えられます。弥生時代後期の土器の出土はみられません。

A. 前期土器 (P O 2 ~ P O 33)

弥生時代前期の土器には、壺15点(底部4点)甕9点(底部3点)がみられます。特に2の壺は復元口径50cmで、口縁部はヘラ刻み、頸部には7条の平行沈線が施されています。この壺の時期は平行沈線の数が多いことから他の壺より少し新しい時期になると考えられます。11の壺は内外面とも細かなヘラ磨きがみられ、縦3本の沈線で区切られた中に2段(推定)に無軸羽状文が描かれています。12・13の壺は沈線で区切られた文様帶の中に、斜格子文様と縦3本の沈線が描かれています。壺の底部14の内面はヘラ状工具による痕がみられます。14・19の壺の底部はススの付着があることから、これらの壺が甕形土器と同じ用途に使用されたと考えられます。

甕形土器には27の様に口縁に刻み目を施したもの、28の様に外反する口縁をもち刻み目をもたず口縁下を横ナデするもの、29のように外反する口縁をもち胴上部に刻み目貼り付け三角突帯を施し、丁寧なヘラ磨きをしたものに類別できるようです。

B. 中期土器 (P O 34 ~ P O 47)

中期の土器は、青木遺跡の編年等からみて中葉、後葉の2時期に分類できるようです。中葉の土器は34の壺、35・36の甕の3点です。35の甕は口縁部にヘラ状工具による刻み目沈線がみられ、36は甕の口縁部で微かに凹線がみられます。これら中葉の土器は青木0期に比定できると考えますが、特に34の甕は中葉古の段階に入るようです。中期後葉の土器は37~47の甕、45・46の高杯、47の器台の11点です。37の壺は口縁部に3条の凹線が入り口縁「く」の字に外反します。口縁内面ナデ仕上げ、胴部外面ハケ目調整です。43の甕は外面ヘラ磨きでススの付着がみられます。45の高杯は復元口径10cm、5条の凹線を使って

外面が飾ってあります。46は高杯の脚部ですが透し孔は不明、4条の凹線を脚端部近くにもっています。47は器台で外面に凹線がみられます。

(3) 土師器 (P O48~P O77・P O122~P O274)

この地区で出土する土師器は、古墳時代前期から糸切り底のある平安時代以降室町時代までみられますが、特に古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物が多く、その大半を窯が占めています。

A. 古墳時代前・中期 (P O48~P O77)

この時期の土器は48~51の壺、52~66の甕、67~70の高杯、71・72の低脚杯、73~76の器台、77の手焙形土器がみられますが、この他にもコンテナ4箱などの土器片があります。48の壺は復元口径19cm。複合口縁になるもので口縁端部は外反し、内外面ともナデ仕上げ。52の甕は復元口径16cm、口縁端面はナデられ外に肥厚し、稜はシャープで胴部内面は右方向のヘラ削り、外面はハケ目調整です。55の復元口径は14cm。口縁部はやや外反し稜はシャープで頸部から器肉は薄くなります。56の復元口径は16cmで、52・55の甕に比べ器肉が厚く口縁も直立気味で、複合口縁の要素がしだいになくなりつつある時期の甕と考えられます。77は手焙形土器と考えられます。厚さ5.5~7.5mmで淡黄褐色、内面ナデ仕上げ、外面ヘラ磨きの痕が微かにみられます。これら古墳前・中期の土器は、青木Ⅲ~Ⅳ期に比定できるようです。

B. 古墳時代後期以降 (P O122~P O274)

古墳時代後期以降の器形には、甕・杯・皿・碗・壺・獸形支脚などがあります。甕は青木^{注3)}跡奈良期編年や伯耆国庁跡編年でみると、第1段階6世紀後半 (P O122)、第2段階7世紀前半 (P O123~P O130)、第3段階7世紀後半 (P O131~P O146)、第4段階8世紀代 (P O147~P O188) の4時期に分けられるようです。その中でも8世紀代の甕は、(a)口縁部の丸くなったもの (P O147~P O165)、(b)口縁端部の角ばったもの (P O166~P O168)、(c)口縁端部の尖ったもの (P O169~P O188) の3形態に分類できるようです。第1段階にくる122の甕は、ほぼ完形で復元口径14cm。最大胴径15.7cm。胴部はやや下方でふくらみをもちます。口縁内外面ナデ仕上げ、内面は胴部ヘラ削りで底部近くから指圧痕がみられます。外面は全体にハケ目調整でススの付着が顕著。剥落部分も多くみられます。第2段階にくる甕は、全体に肉厚で口縁内外面ナデ仕上げ、胴部内面ヘラ削り。外面ナデ仕上げで口縁は「く」の字に外反します。123・124の甕はススの付着が明瞭にみられるものです。第3段階の甕は、第2段階に比べ器肉がやや厚くなります。調整方法は前段階と変りなく、口縁内外面ナデ仕上げ、胴部内面ヘラ削りです。第4段階(a)の甕は、口縁端部に丸味をもつもので、口縁内外面ナデ仕上げ、胴部内面ヘラ削りです。特に152・163にはススの付着が顕著にみられます。(b)の甕は口縁端部の角ばったも

ので167はその特徴をよく示しています。この形態の甕はわずかに3点のみです。(c)の甕は、口縁端部の尖ったものです。170の甕は肉厚で、口縁内面ハケ目調整の後ナデ仕上げをし段がつきます。171は口縁端部でゆるく外反する口縁をもち、外面には1条の強い横ナデがみられます。内面はナデ仕上げ、胴部内面へラ削り外面はナデ仕上げです。

杯 (P O202~P O243) は伯耆国遺跡編年などからみると8世紀末 (P O 202~P O 210)、9世紀前半 (P O211~P O225)、9世紀後半 (P O226~P O233)、10世紀前半 (P O234~P O243) の4期に大別できると考えられます。1期の杯の特徴は内外面ナデ仕上げ、口縁部が底部に近いところで「く」の字に外反する要素をもっています。底部はシャープでうず巻き状をなし、ヘラまたは指でナデ取っています。内外面にススの付着が顕著です。2期の杯は内外面横ナデ仕上げ、口縁端部に近いところで「く」の字に外反します。底部は1期と同じくヘラおこしのあとナデ仕上げ、ややふくらみかけんです。内外面に赤色塗彩がみられます。3期から226~230のように断面三角貼付高台もしくは貼付高台を有する杯が出てきます。これらの杯は貼付高台が底部外縁に張り出し気味につき、内外面とともに横ナデ仕上げ、赤色塗彩が施されています。4期になると底部に糸切り痕の出現がみられ、234~236は貼付高台をもつものです。236は黒色土器で内面に丁寧なヘラ磨きがあり、底部は糸切り痕を消そうとした意図がうかがえます。243も内面黒色です。その他、奈良時代~中世頃の土器と考えられるものがあります。これらの土器は横ナデ仕上げをした凹線が明瞭にみられ、底部には糸切り痕があり丁寧な作りがしてあります。しかし、全体に摩滅が激しく明確な特徴をとらえることは困難です。264は因幡国遺跡から出土例がみられるもので、有脚小杯になると考えられます。杯同様皿 (P O201) の出土もみられますが、復元口径22cmで平らな大型のものです。内外面ともに赤色塗彩が施され、伯耆国遺跡編年でいわれるところのSD37の古い要素をもつものと考えられます。

(4) 須恵器 (P O82~P O120)

緊急調査地区の須恵器は、大阪府陶邑古窯跡群の編年からすると、大雜把に陶邑Ⅱの1・2、Ⅲの3・4、Ⅳの5・6、Ⅴの1・2、Ⅵ、Ⅶ期に比定できるものと考えられます。

A. Ⅱの1・2期 (P O82・83)

82・83は蓋杯の蓋です。82は復元口径13cm。稜は短くてシャープさを欠き、口縁部が直下に下り端部で内傾する凹線がみられ段をなします。天井部には灰釉がかかり、内面にも灰釉の付着がみられます。

B. Ⅱの3・4期 (P O84~P O86)

84は蓋杯の蓋で復元口径12cm。稜はみられず天井部に丸味をもちます。85も蓋杯の蓋で復元口径15cm。稜はわずかに残り、口縁端部は丸味をもつようになります。86は蓋杯の身で復元口径14cm。口縁部が大型化し、立ちあがりは比較的低く内傾気味に立ちあがります。

C. IIの5・6期 (P O87~P O100)

87・88・89は蓋杯の蓋です。いずれも天井が平らに近くなるようです。87は復元口径15cm。88は復元口径15cm、外面口縁部にヘラによる2本の凹線がみられます。89は復元口径15cm。90から100までは蓋杯身です。90の復元口径11cm、受部にのみ灰釉がみられます。91は90に比べ器高が低く、内外面に点々と灰釉がみられます。その他の杯身も、立ちあがりは受部端面より下方に移ってゆき、立ちあがりが消滅しつつあることがわかります。また口縁端部はわずかに内傾気味です。

D. IIIの1・2期 (P O101~P O108)

101から107は蓋杯の蓋です。101の蓋は、この時期の特徴を示す宝珠つまみがつくものと考えられます。他の蓋も同様で蓋の内面にかえりが出現し、これまでの蓋杯を逆にした形となります。108は蓋杯身で、底部端よりやや内側からハの字に開く高台ができます。

E. IV期 (P O109~P O114)

110は蓋杯の蓋で復元口径11.5cm。偏平な宝珠つまみの付く器形で、端でZ字状にカーブを描き端部で下方へ曲がり段をなします。

F. V期 (P O115)

この時期の須恵器は115の杯しかみられません。底部には糸切り痕がみられます。

G. その他の須恵器 (P O116~P O121)

116は胴部で外面たたきの後カキ目調整、内面青海波文です。118も胴部で内面ナデ仕上げ、外面半すり消しです。117は中世陶器とみられ、外面カキ目調整、内面一部カキ目調整でよく剥離しています。121は平瓶の胴の一部と考えられ、表面には灰釉がかかっています。

(5) 緑釉陶器

緊急調査地区では遺構に伴う遺物が少ないですが、この緑釉陶器も遺構に併わない遺物の1つです。口縁端部に近い所で丸味をもち復元口径8cmで小形の杯かと思われます。口縁端部では緑釉の剝離が見られます。

(6) 塙輪 (P O78~P O81)

緊急調査地区での埴輪は、石柳状遺構に用いられた朝顔型埴輪 (P O78) の一部と、円筒埴輪片 (P O79~P O81) です。これらの埴輪は古墳時代中期のものと思われます。

A. 朝顔型埴輪 (P O78)

籠の突出も当遺跡のものと変らず、内面は粘土貼り付け後指ナデ仕上げ、外面第1次が縦ハケ、2次横ハケ調整です。

B. 円筒埴輪 (P O79~P O81)

いずれも、埴輪棺に用いられていました埴輪に比べて籠の突出が低いのが特徴です。内面は

指で押しただけのものと横ハケのものとがあり、外面は縦ハケ調整です。

(7) 竈・獸形支脚 (P O143～P O146)

この地区で出土した竈は143～145です。143は竈のひさし部分になるもので火をうけた痕が明瞭にわかります。調整はナデ仕上げ、色調は内面黒褐色、外面黄褐色。144は竈の横の部分で、調整はナデ仕上げ、色調は淡黄褐色です。145は竈の下になる部分で、内面斜下から上へのヘラ削り、外面ナデ仕上げです。色調は淡黄褐色です。

(8) 管 玉

深い緑色をした碧玉製で、長さ1.9cm・幅0.65cmを測ります。穿孔は片側からしてあり中心よりややはざれています。

(9) 古 錢

13D地区南東区の第2層の直上面より、皇朝十二銭の一つである貞觀永寶が1枚出土しています。この層からは多くの鉄製品が出土しています。この貞觀永寶は、平城宮發掘調査報告^(註5)IVで分類されている「貞觀永寶[A]」に類似し、銭文の鋳出しがきわめて良好で、「貞」の第8・9画が斜外方に張り、いわゆる「張足貞」といわれるものに近いようです。また「寶」が比較的大きくなっています。色調は暗緑褐色。大きさは直径約1.9cm・厚さ0.14cm、重さ約6gで、内郭穴は1辺4.7mmの正方形です。

(10) 鉄製品 (I 1～I 14)

緊急調査地区出土の鉄製品の多くは、貞觀永寶の出土した層を中心とした層に集中しており、遺構に伴ったものではなく平面的に散乱していました。

A. 釣針 (I 1)

両端が欠けているものの7.9cm残っており、上部から2.7cmほど幅約2mm程度の糸が巻いてあります。下端はやや曲っており、針の部分は欠けています。断面は方形で先端部が細くなっています。

B. 鐛 (I 2)

一部破損しており、全体の大きさは不明です。断面は方形で、使用したためか多少ねじれています。

C. 楔 (I 3)

先端が少し欠けてはいるもののほぼ完形で長さ4.7cm・幅1.1cmです。

D. 鉄釘 (I 4～I 6)

釘と明瞭にわかるものは3本出土しています。4は先端部が欠けているものの8.6cm残っており、断面は方形です。5は下端が欠けており残存部で3.9cmを測り、断面は方形。やや小さめの釘です。6は完形で5.8cm。断面は方形で太く先端は角錐状です。釘の頭は3本とも逆L字状になっています。

(11) 紡錘車 (B11・B12)

紡錘車は2個体出土しています。11は滑石製截頭円錐形で上面と下面・側面に鋸歯文の刻まれたもの、12は鉄製の円盤形のものです。前者は古墳時代後期、後者は奈良から平安時代のものと思われます。

(12) 五輪塔

この調査地区では風・空輪18点、火輪5点、水輪24点、地輪19点の総数66点の出土がみられました。また、宝篋印塔の宝珠の部分かと思われるものも1点出土しています。

A. 地輪 (S1～S19)

1を除いてすべて上面に凹部分はなく素面ですが、上面あるいは下面になる部分の作りの粗雑なものもあり、安定感を失っています。

B. 水輪 (S20～S43)

風・空輪に比べて数多く出土しています。石の重さを軽くするためか上面、下面とも中央が多少削られています。その他水輪のほとんどは、重心が中心よりやや下り偏平な球体状をしています。

C. 火輪 (S44～S48)

44・46・48は上面に柄穴をもつもので45・47は柄穴をもたないものです。これらの火輪は、軒先の真反りがあまりなく古い形態の要素を含んでいるものかと考えられます。しかし、48は軒先が四隅に大きく反るので、他の火輪と比べて時代が降るを考えます。

D. 風・空輪 (S49～S66)

すべて一石彫成で49・53・58・62はぼぞ穴のあるもの、51は柄をもつものです。

これらの五輪塔群の石材は、加工しやすい石英安山岩、安山岩質凝灰岩で造られていますが梵字や刻銘などはみられませんでした。また風化作用が激しいことから長時間この五輪塔が立っていたことが推測されます。五輪塔の明確な製作時期はわかりませんが、ほぼ室町時代から安土桃山時代の間に引き継ぎ立てられたと考えられます。

註1. 島根県教育委員会「青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ—青木遺跡出土の繩文土器について—」昭和53年

註2. 島根県教育委員会「青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅲ」昭和51～53年

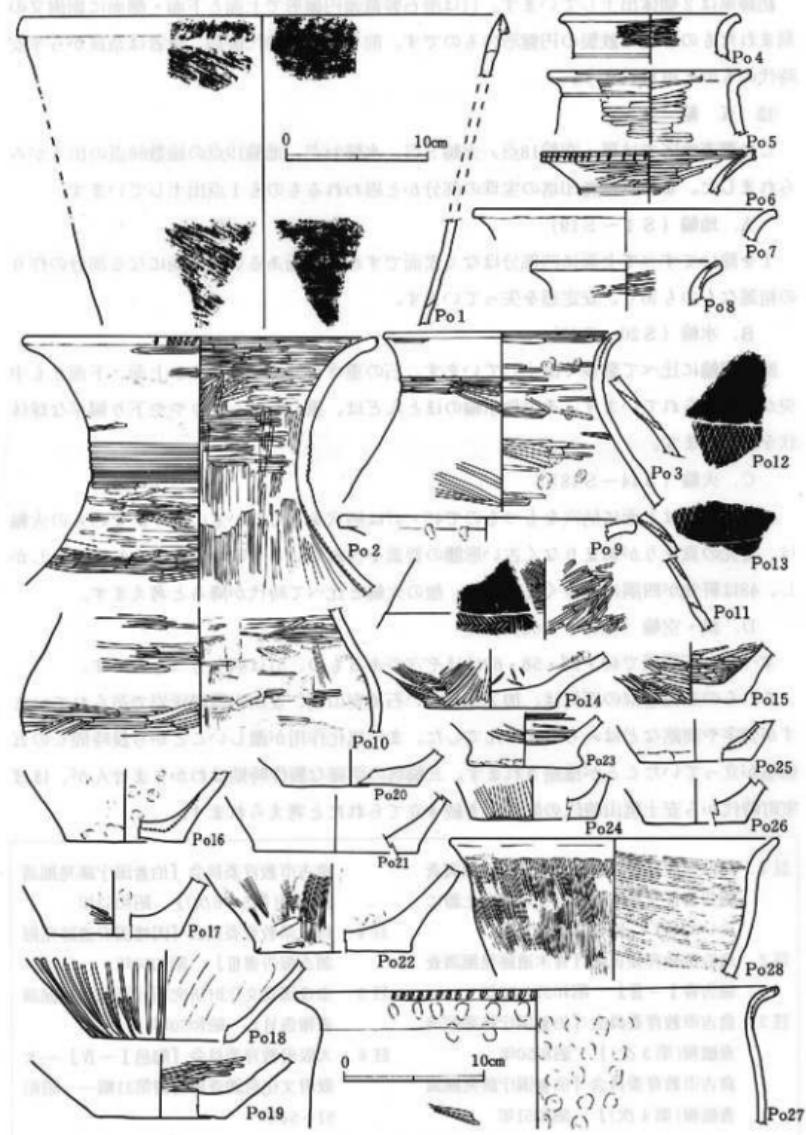
註3. 倉吉市教育委員会「伯耆国跡発掘調査概報(第3次)」昭和50年
倉吉市教育委員会「伯耆国跡発掘調査概報(第4次)」昭和51年

倉吉市教育委員会「伯耆国跡発掘調査概報(第5・6次)」昭和53年

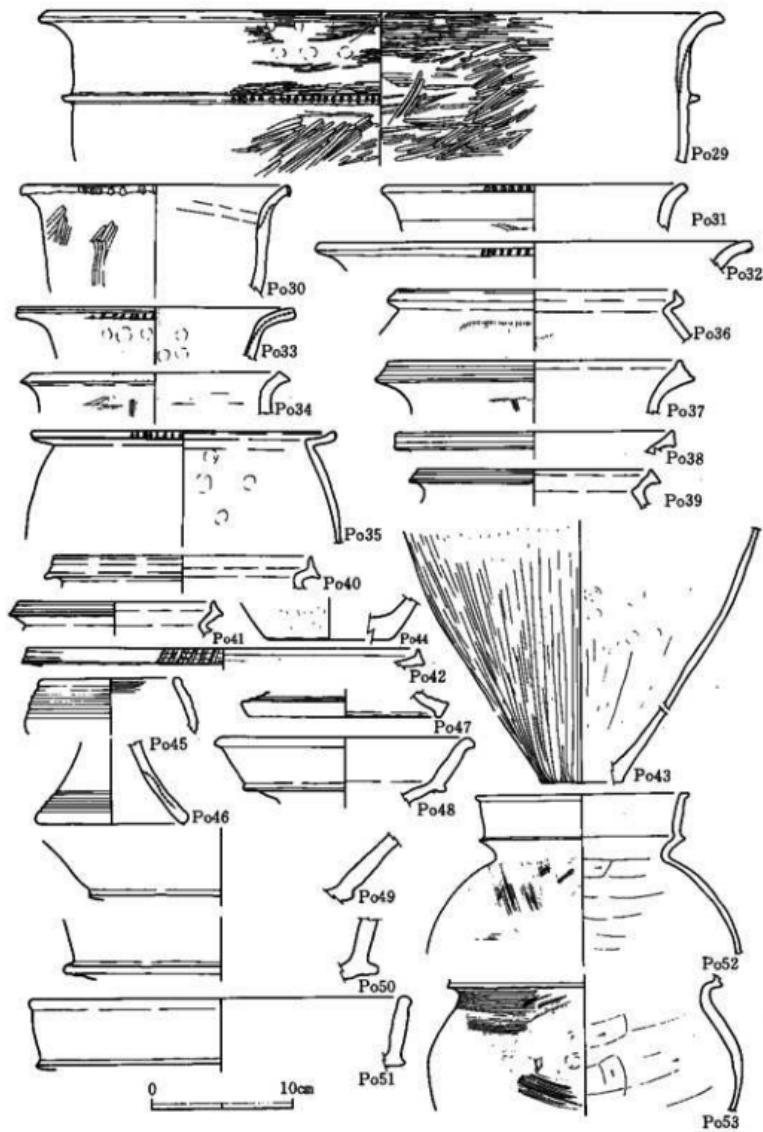
註4. 島根県教育委員会「因幡國府遺跡発掘調査報告書Ⅲ」昭和50年

註5. 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅶ」昭和50年

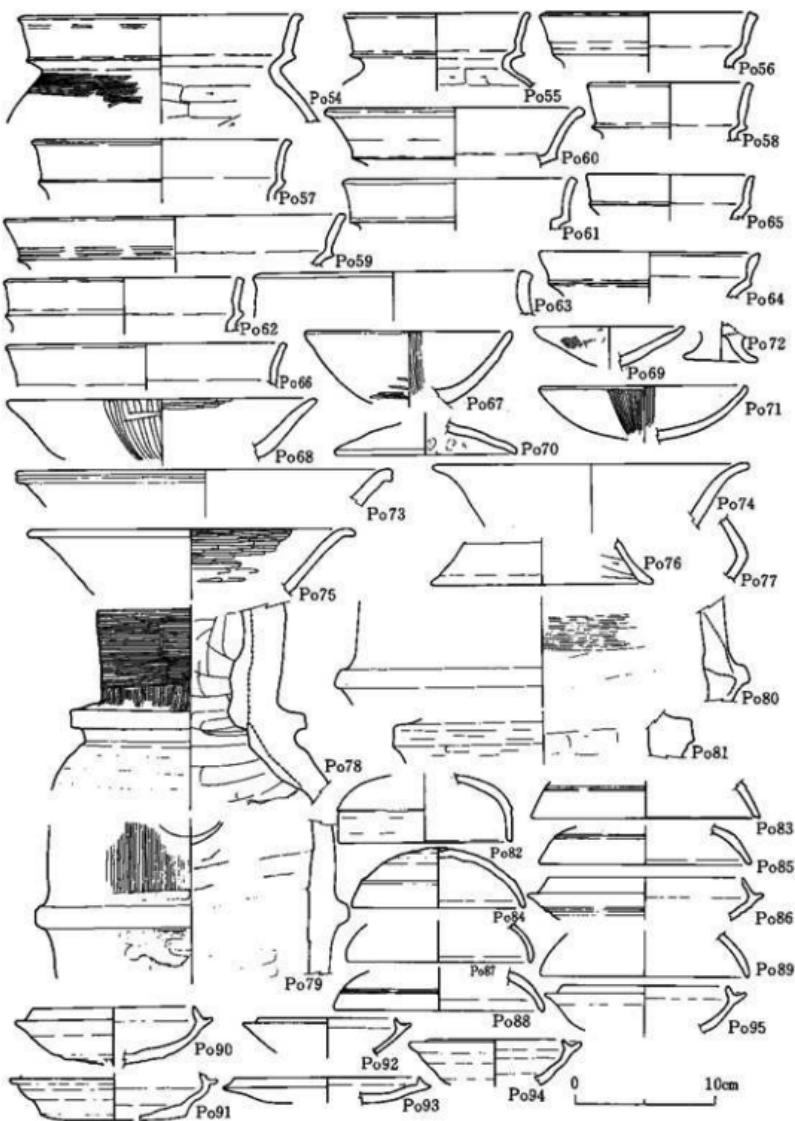
註6. 大阪府教育委員会「陶邑Ⅰ～Ⅳ」一大阪府文化財調査報告書第31輯—昭和51～54年



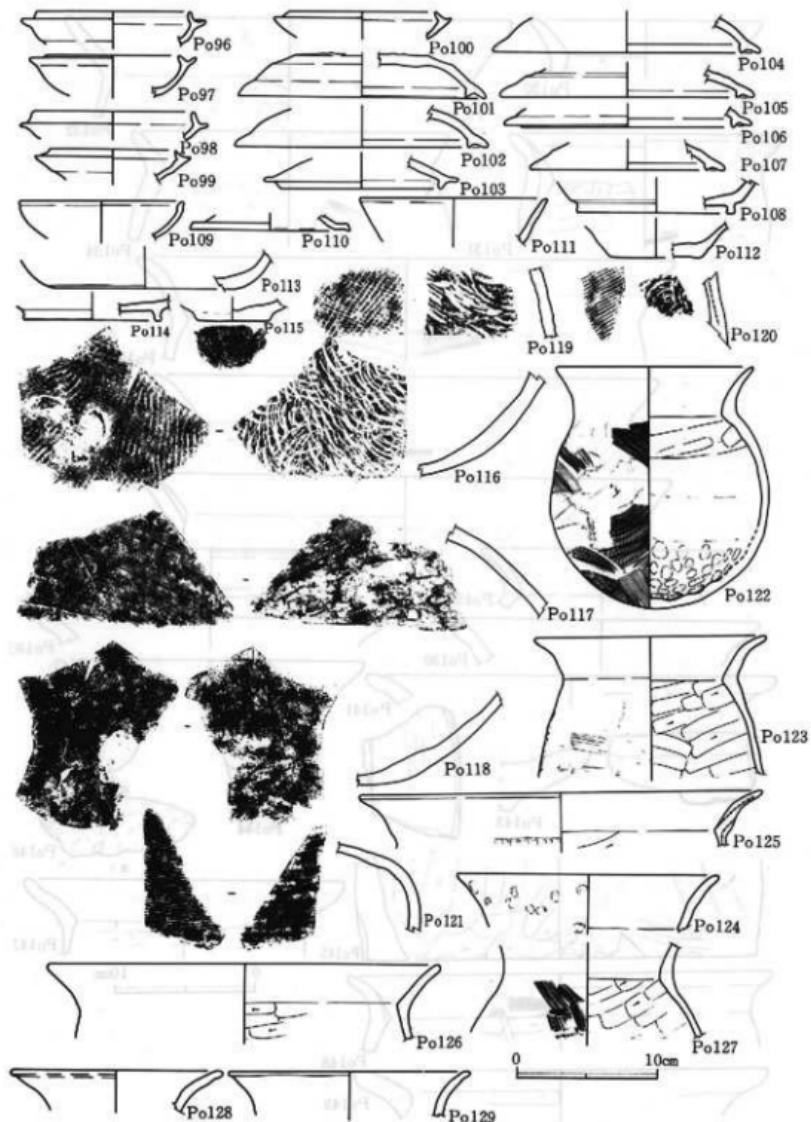
挿図13 土器実測図1



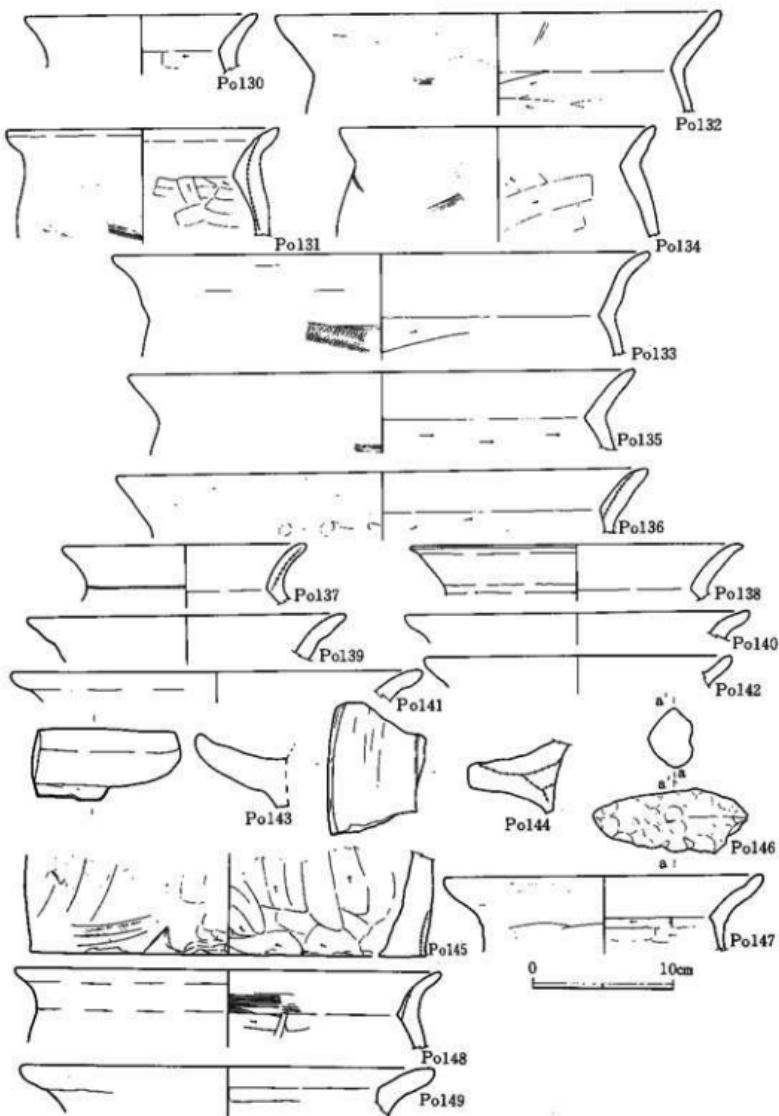
挿図14 土器実測図 2



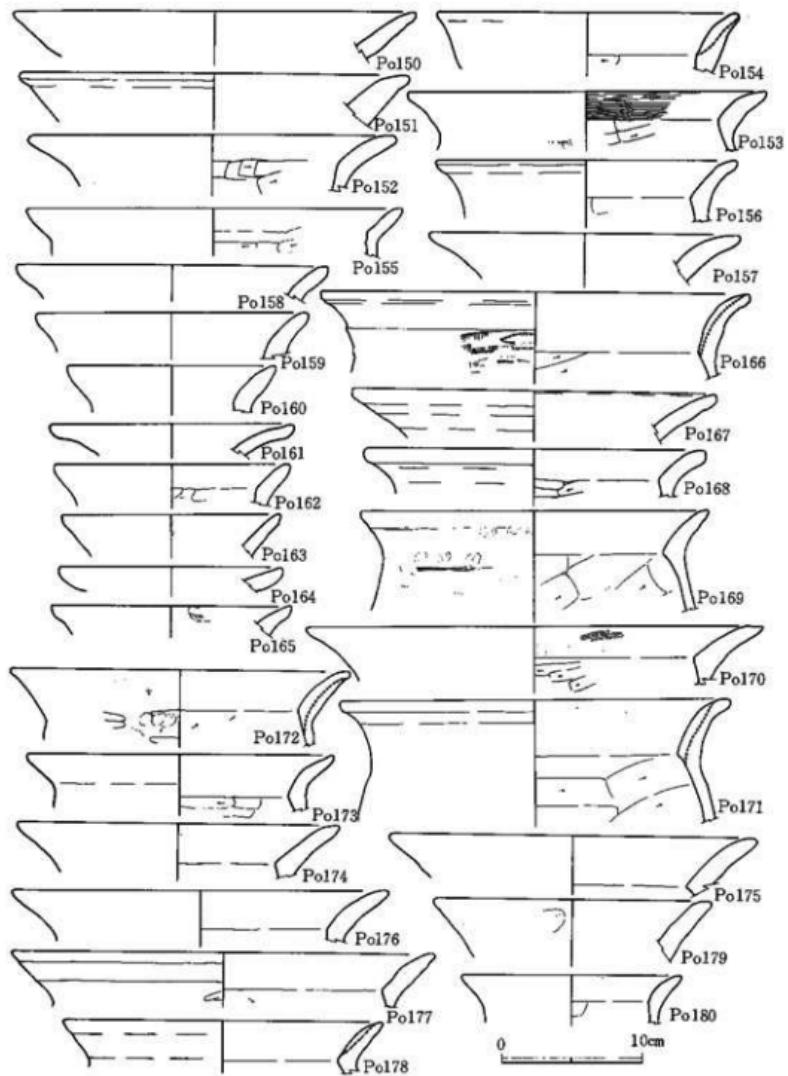
插図15 土器実測図3



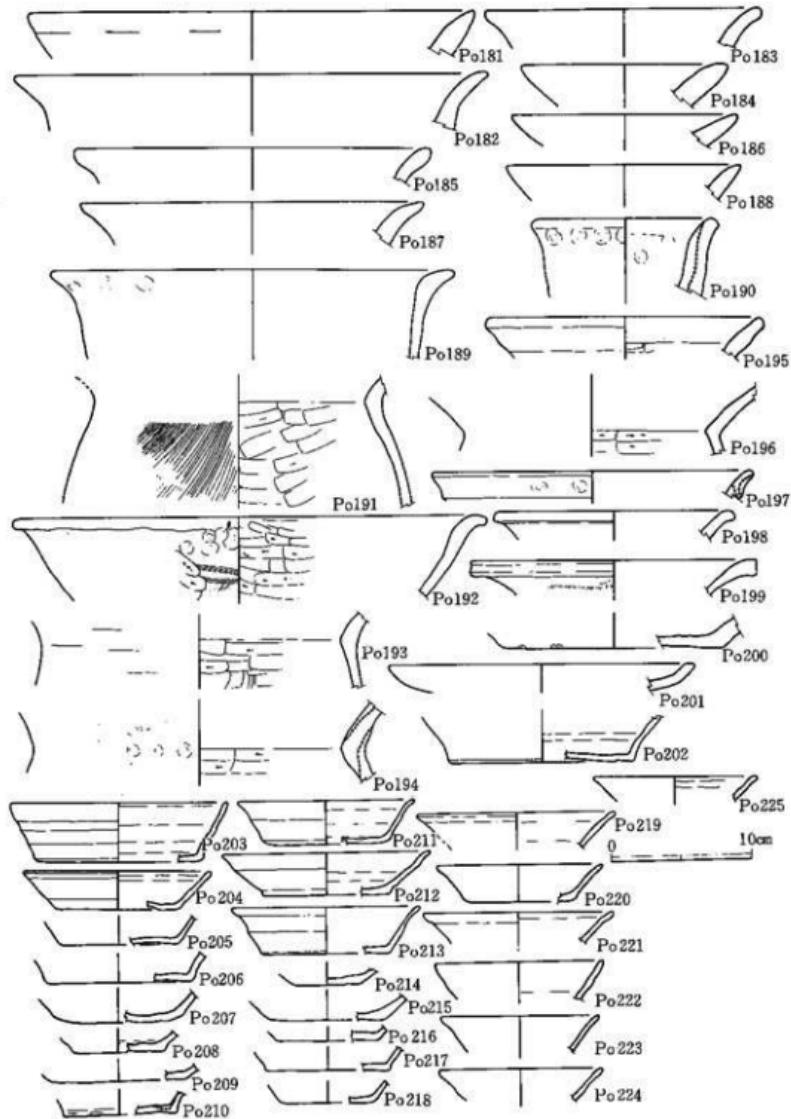
挿図16 土器実測図4



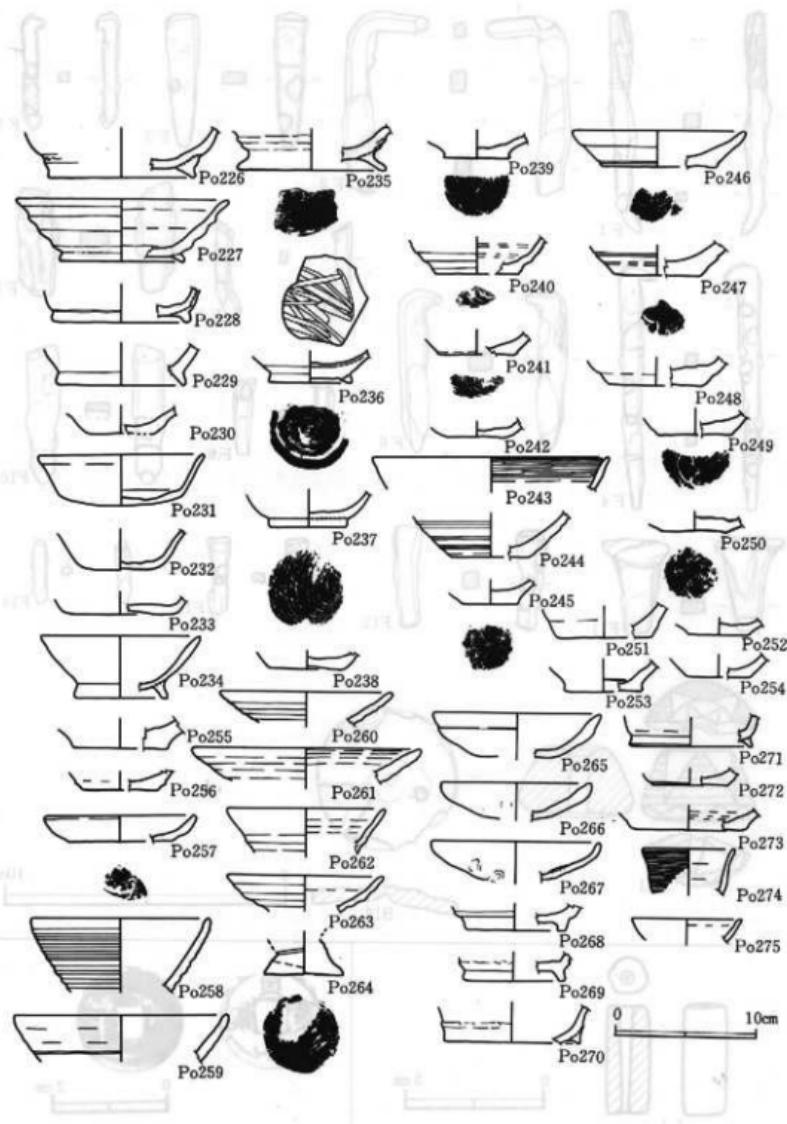
插図17 土器実測図 5



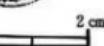
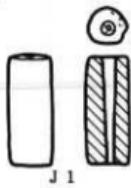
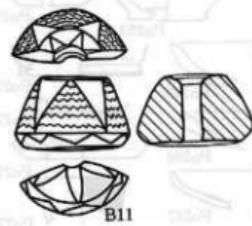
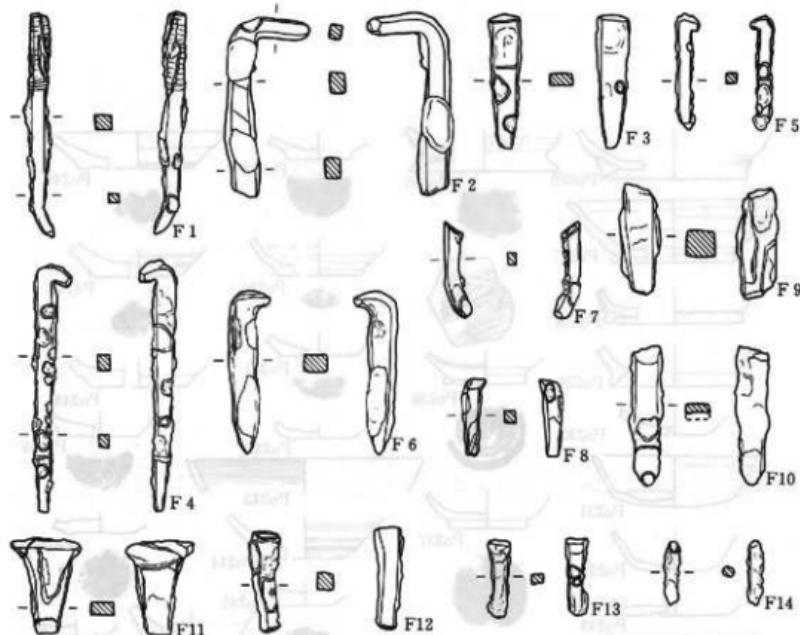
挿図18 土器実測図 6



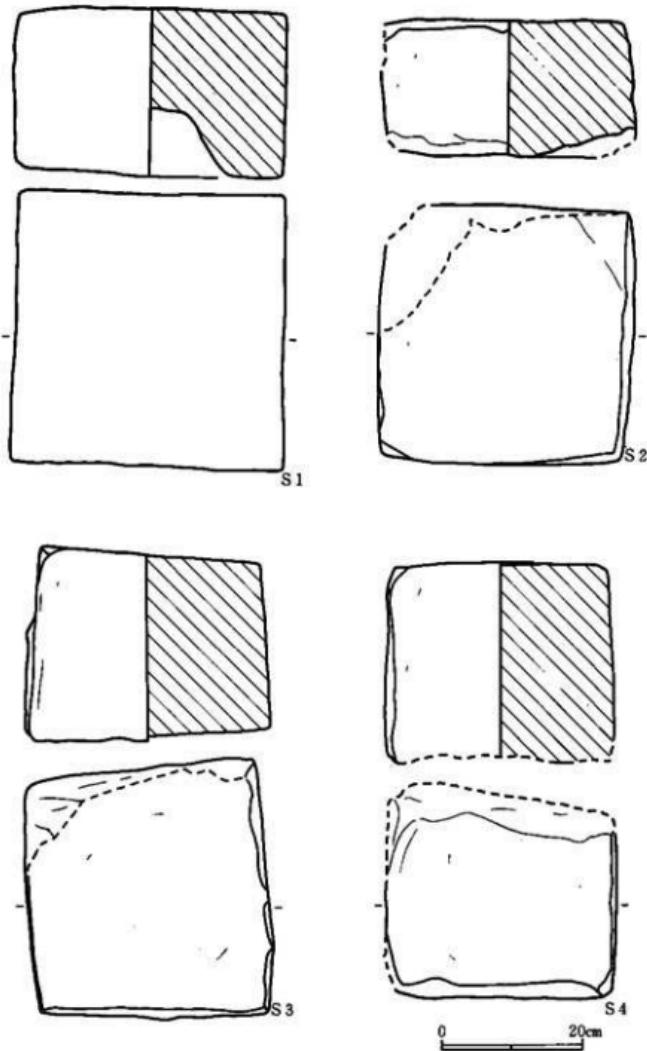
插図19 土器実測図 7



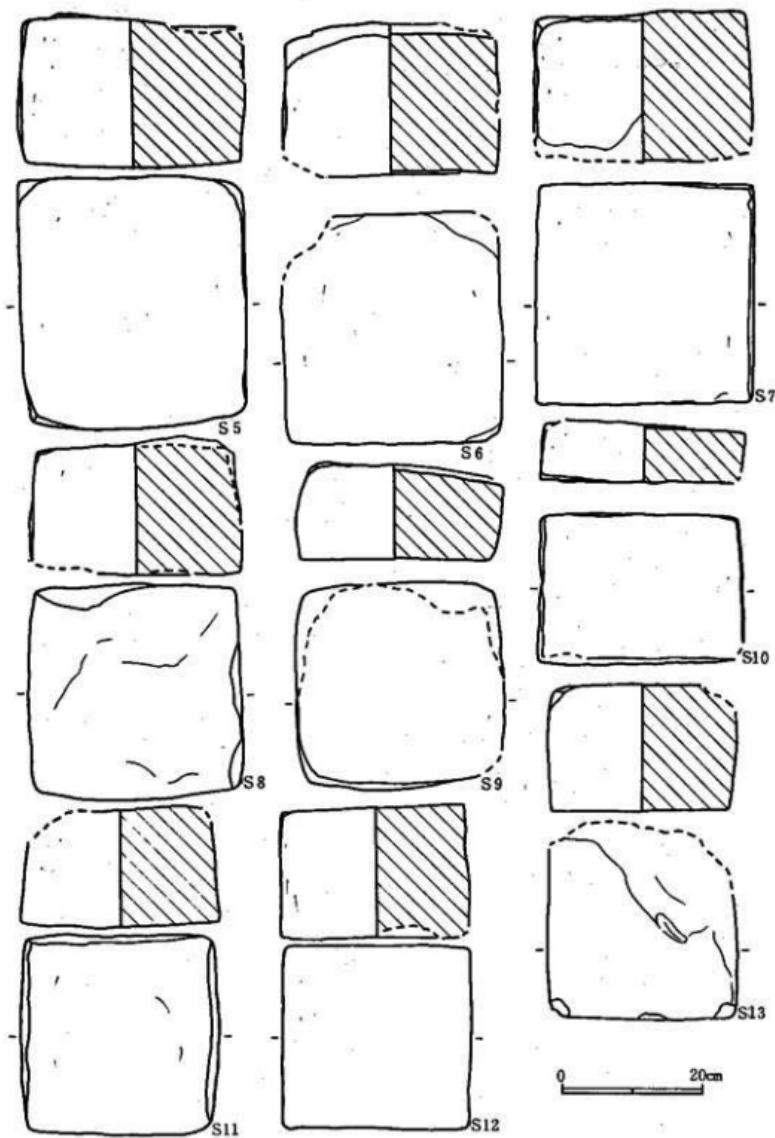
插図20 土器実測図 8



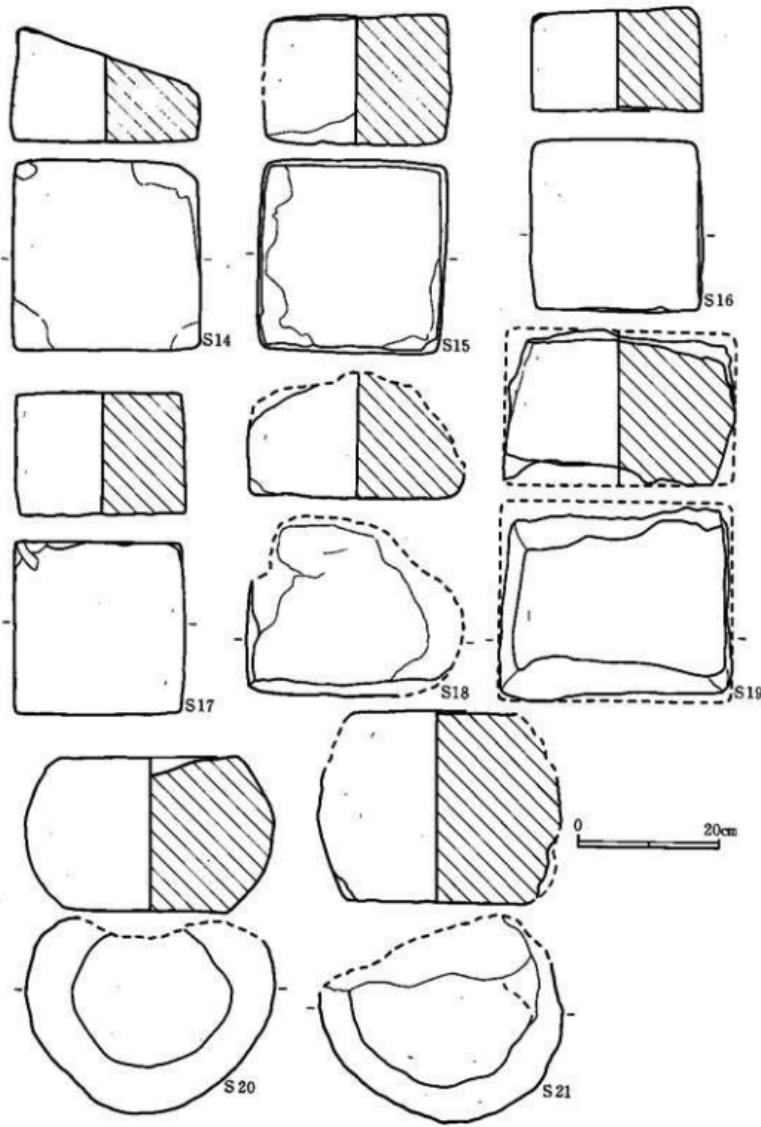
插図21 鉄製品他実測図



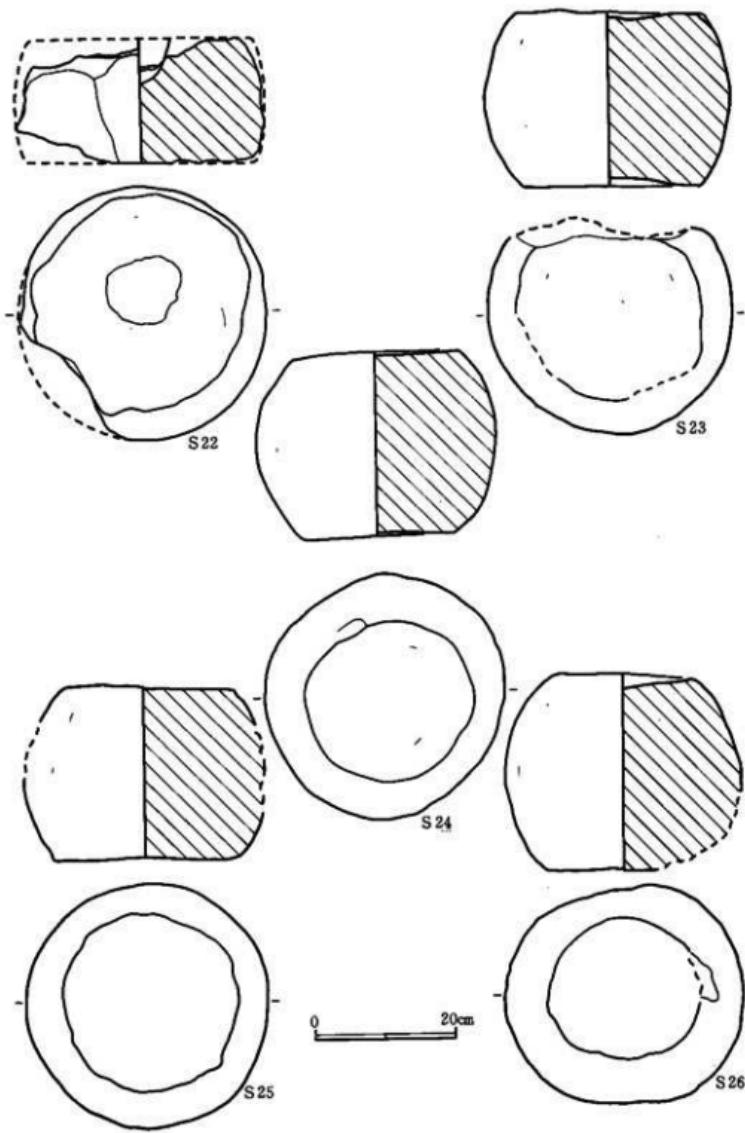
插図22 五輪塔実測図 1



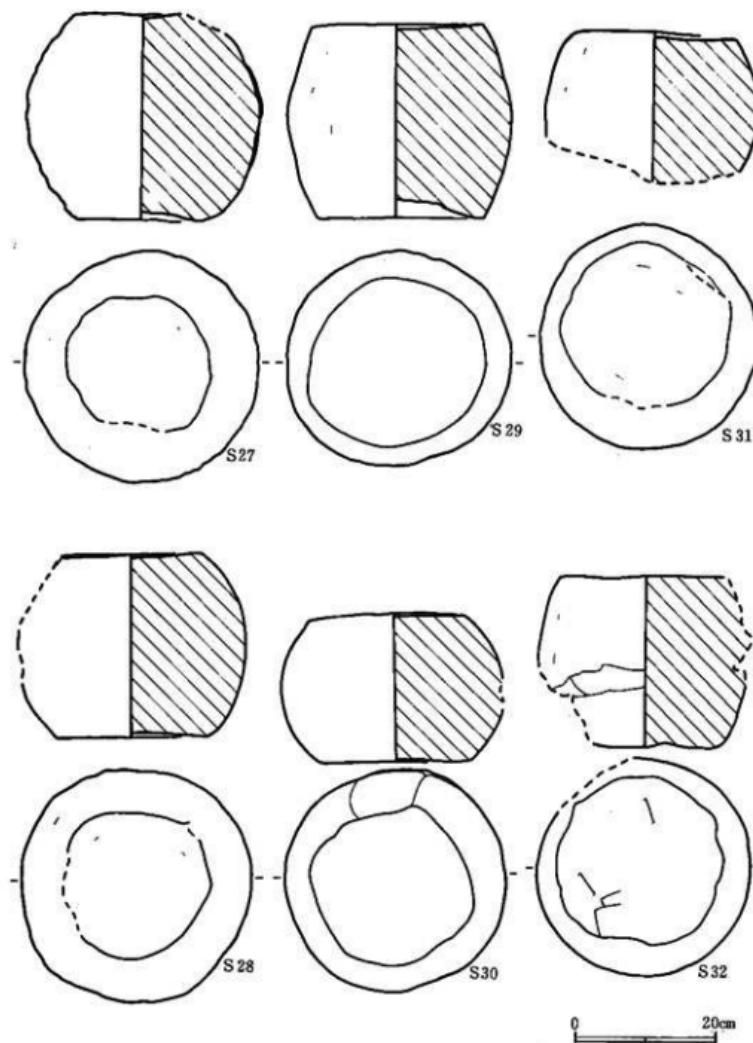
插図23 五輪塔実測図 2



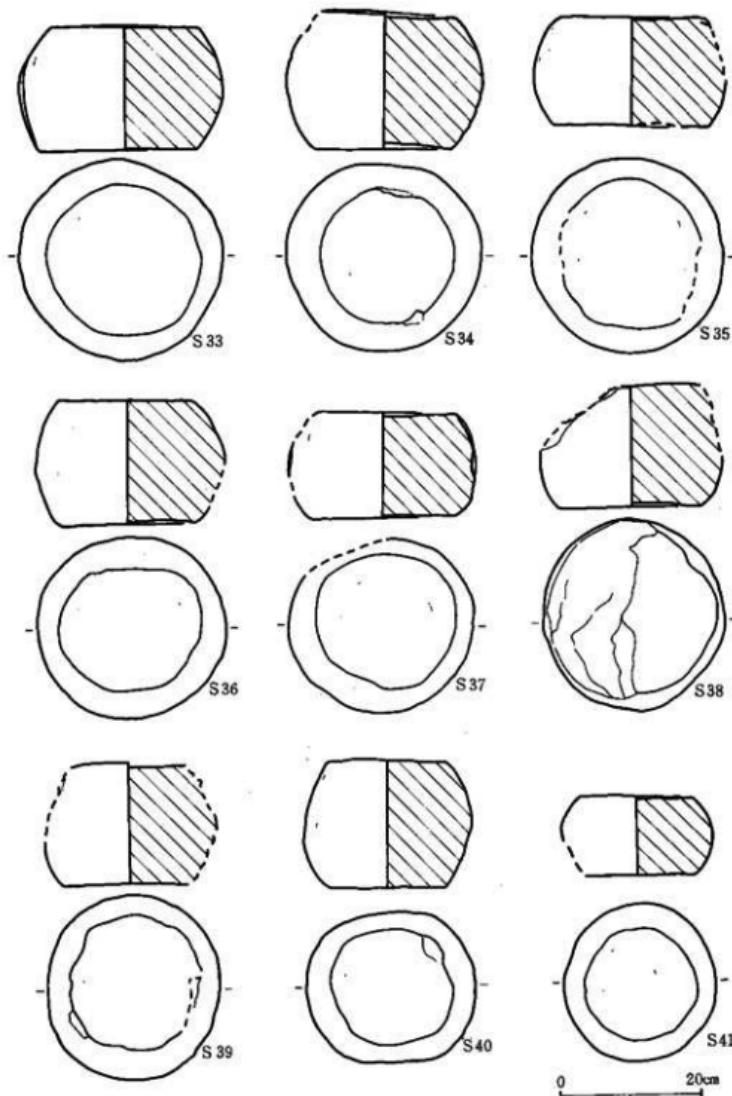
插図24 五輪塔実測図 3



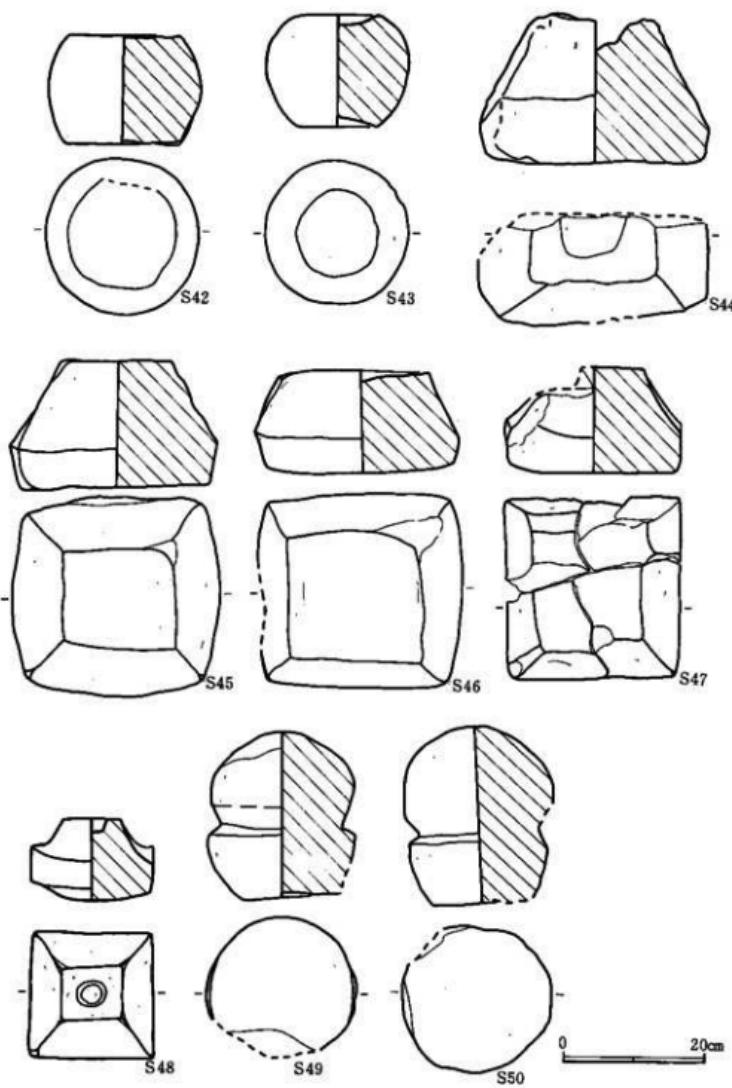
插図25 五輪塔実測図 4



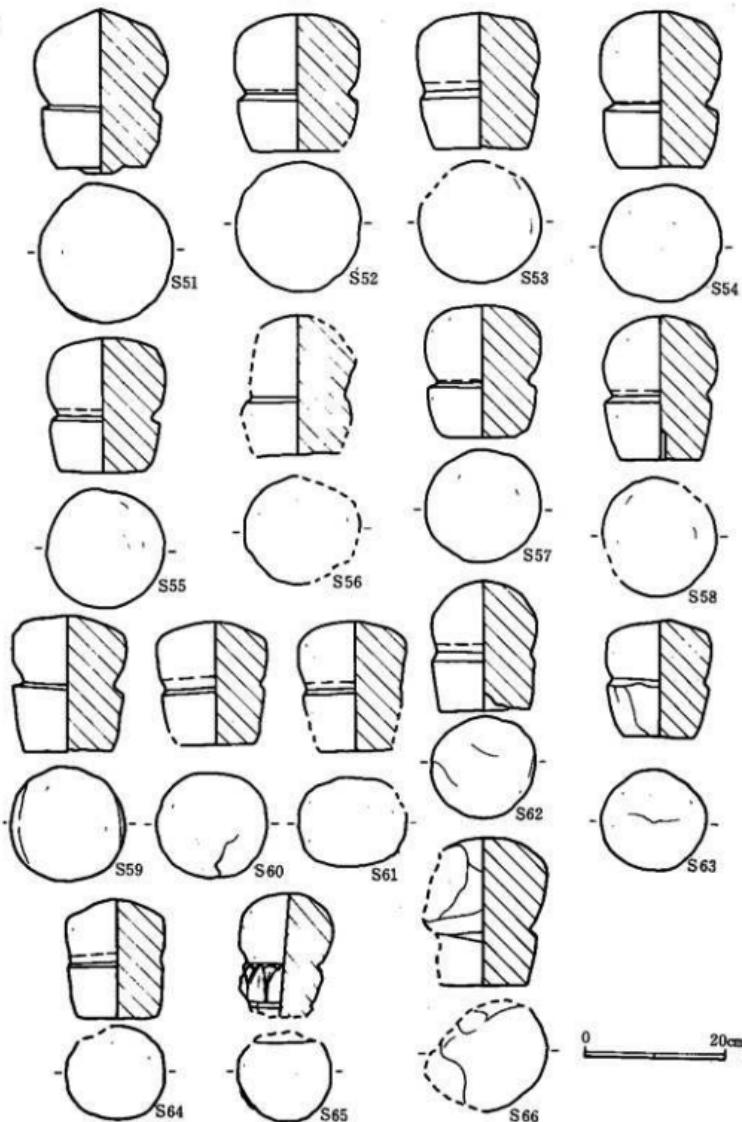
挿図26 五輪塔実測図 5



挿図27 五輪塔実測図 6



插図28 五輪塔実測図 7



插図29 五輪塔実測図 8

第V章 研究ノート

第1節 長瀬高浜遺跡の五輪塔について

筆尾 千恵子

五輪塔は、地・水・火・風・空輪の五つから成り、仏教の五代思想を現わすものといわれています。^(註1)その起原は明確でなく、塔形が資料にみられるのは『醍醐寺新要録』の中に記された、應徳2年(1085)の刻名をもつものが初現のようです。このこ



写真16 大日寺五輪塔群



写真17 大日寺五輪塔

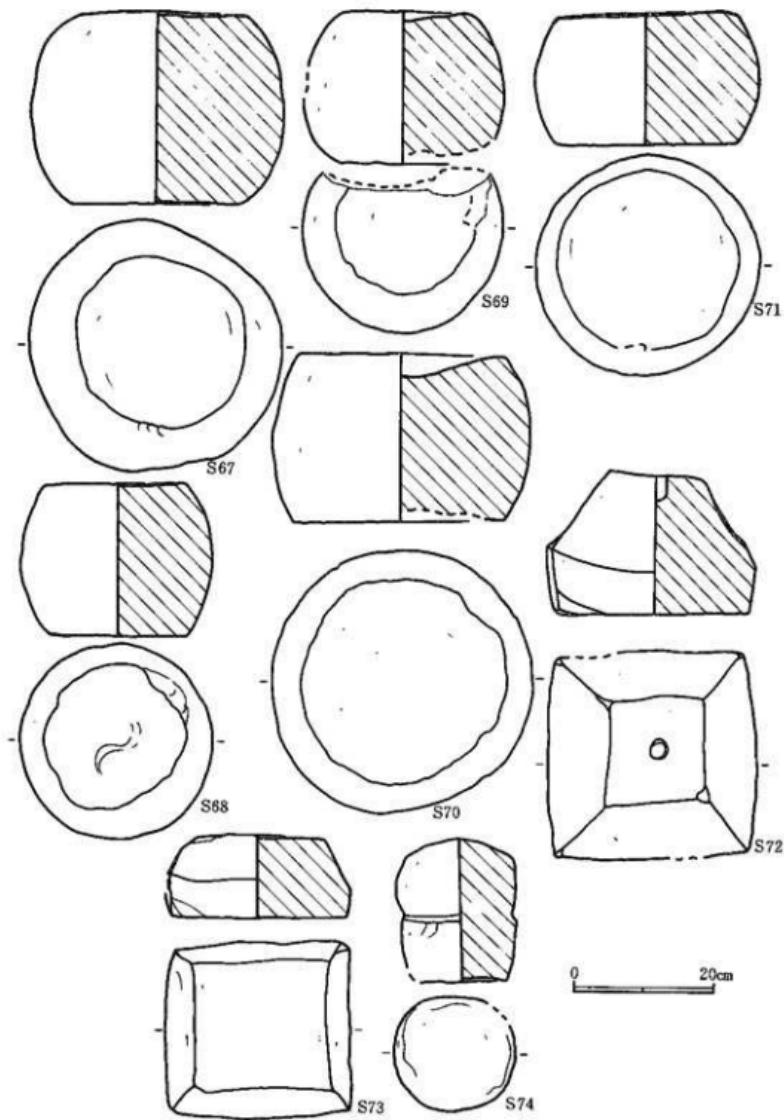
とからすると、五輪塔の塔形そのものは、平安時代中頃にはすでに出現していたよう^(註2)です。全国的にみて古い刻名をもつものに^(註3)中尊寺境内釈尊院墓地に在る釈尊院五輪塔



写真18 赤坂五輪塔

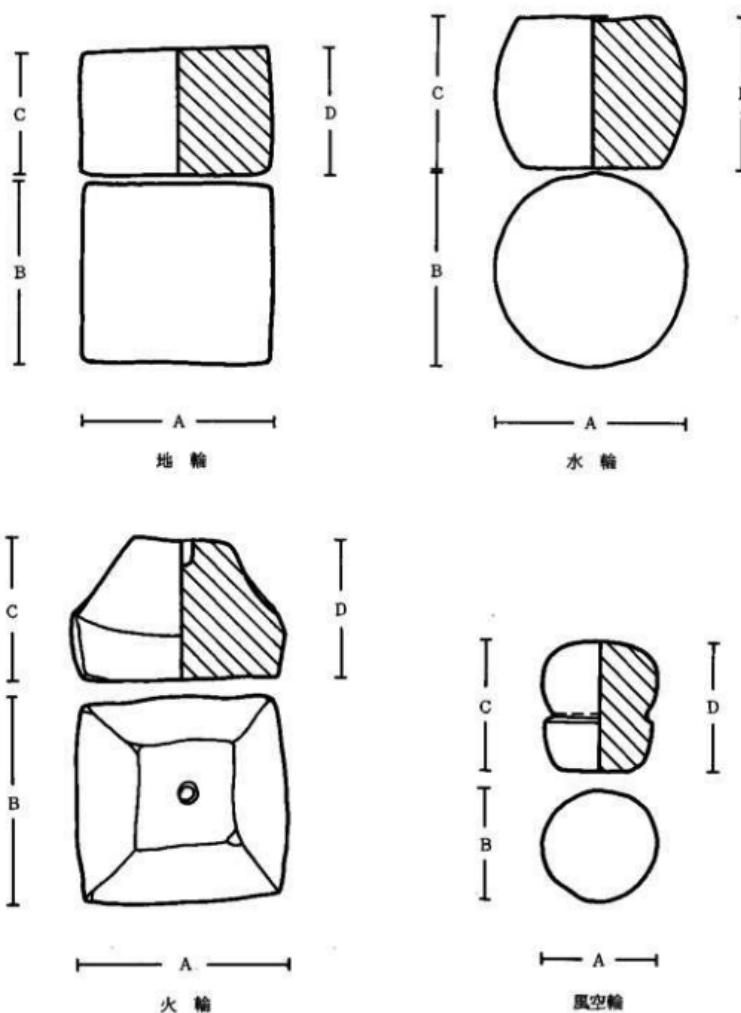
が知られていますが、鳥取県内では、倉吉市桜に在る「大日寺五輪塔群」が鎌倉時代の様式を留める代表的な五輪塔です。この他にも鎌倉時代の様式を留めるものに中山町字赤坂^(註4)の五輪塔などもみられます。

さて、長瀬高浜遺跡出土の五輪塔は総数74点。内訳は地輪19点、水輪29点、火輪7点、風・空輪19点です。そのほとんどは緊急調査地区からですが、水輪5点、火輪2点、風・



插図30 緊急調査地区外五輪塔実測図

空輪1点がそれ以外から出土しています。各輪の出土数からすると火輪の数が僅かですが、これは南側の湧水が激しかったため検出が困難だったとも考えられます。が、緊急調査地区で多くの地・水・空輪の出土があったことから考えて、五輪塔が長瀬高浜遺跡に建



插図31 五輪塔各輪の計数測定図

てられた後人の
手が加えられた
のではないかと
も考えられます。

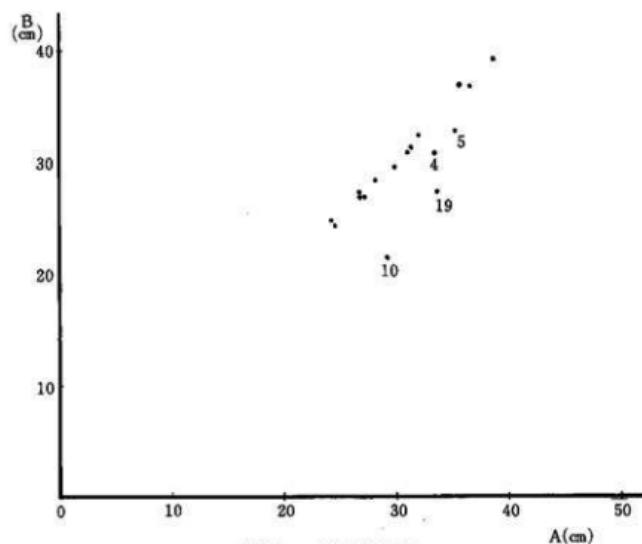
長瀬高浜遺跡
の各輪を個別に
みると、地輪の
S 1 は下面と思
われる部分に10
cmほどの凹部を
もちます。これ
は全体高の半分
ほどを占るもの
で、地輪全体の
重量を軽くする

ための孔かとも
思われますが、
骨蔵器、あるいは
はその他の納入
物を入れるため
(底)の納入孔かとも
考えます。ただ
緊急調査では、
納入物らしきも
のの出土はみら
れません。ここ
で出土した地輪
は、総体的に方
形を成していま
す。

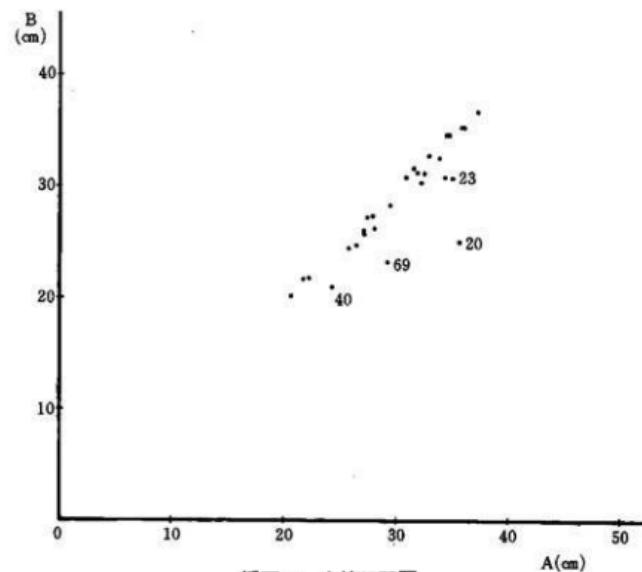
(挿図32参照。

S 4・5・10・

19は壊れている)



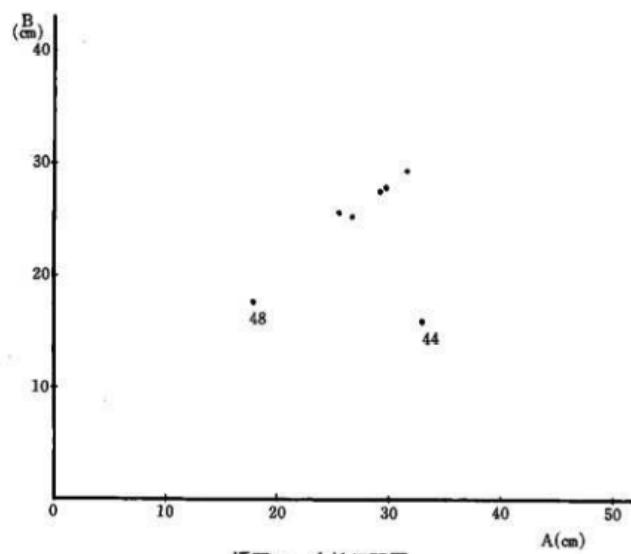
挿図32 地輪相関図



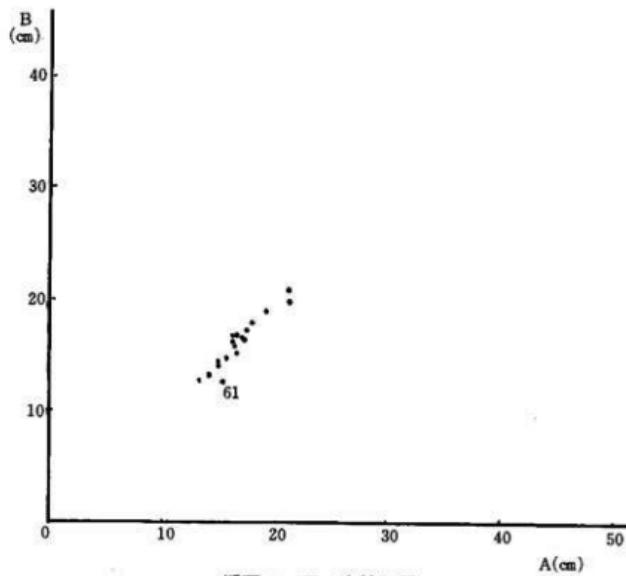
挿図33 水輪相関図

水輪は出土しているものの多くが、上・下面にわずかなくぼみをもちます。S 22の水輪は上面に高さ6cm余りの凹部をもちますが、これは納入孔ではないかと考えます。水輪もほぼ円形を成すようです。(挿図33参照。S 20・23・69は壊れている) S 40

はわずかに椭円形を成します。このことから、長瀬高浜遺跡でみられる水輪には2形態あるかと思いますが、石工の違いというよりは時間的な差があったのではなかろうかと思われます。火輪についてみると、柄穴をもつもの(S 40・46・48)ともたないものの2形



挿図34 火輪相関図



挿図35 風・空輪相関

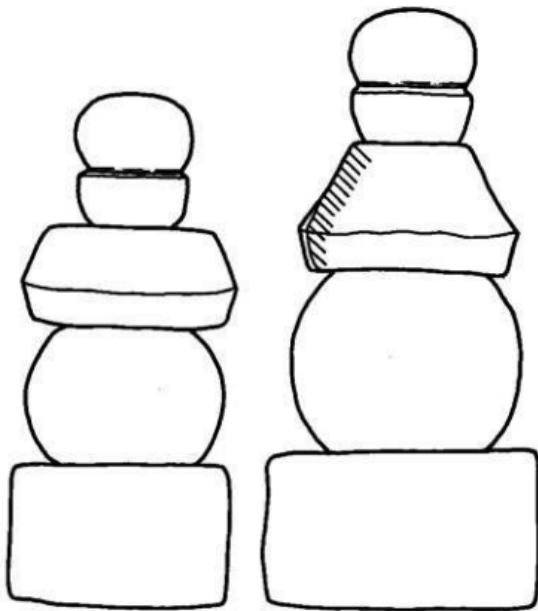
輪がみられます。火輪もほぼ方形を成します（挿図34参照。S44は壊れている）が、S48はその塔形からすると他の火輪に比べ、新しい時期の要素をもつようです。また、四隅の反るものもこのS48が代表的で、他の火輪は反りがほとんどみられません。

風・空輪にも火輪に認められたような形態のちがいが認められます。

それは、柄穴をもつもの（S49・53・58・62）と柄があるもの（S51）、風・空輪下面が平坦なものの3形態です。風・空輪も円形のものがほとんどです（挿図34参照）が、S61は楕円形のものです。これは水輪にもみられたような、時間的な差ではないかと考えます。

以上各輪についてみてきましたが、長瀬高浜遺跡では五輪塔の正確なセットの出土はまったく認められませんでした。そこで、火輪・風・空輪の形態から、セット関係になるものがあるかと考えましたが、セット関係が認められませんでしたので、次に石材からその関係を追ってみました。石材の質によるセット関係が、作られた当時の五輪塔を現わすものかどうか疑問はありますが、長瀬高浜遺跡では挿図36のような五輪塔が在ったものと予想されます。（但し火輪についてはその限りではありません）

緊急調査地区で出土した五輪塔は、淡灰褐色粘質砂層の面で白砂に埋れた状態でしたが、他の地区から出土した五輪塔も白砂に埋れた状態で出てきました。このように砂丘地の中に五輪塔群がみられるのは、県内では浦富五輪塔群（岩美郡浦富）、浜湯山五輪塔群（福部村湯山）、白兎身千山五輪塔群（鳥取市白兎）^{〔註7〕}の3カ所です。いずれも日本海に面した砂丘地にありますが、これらの五輪塔群の関係はまだ解明されていないので、今後の課題に



挿図36 長瀬高浜遺跡出土五輪塔復元図

なると思います。

香葉館

—付録—

五輪塔は、中世以降庶民に普及していったようですが、今なお田畠の辺ではそれらの五輪塔をみることができます。写真19は西伯郡中山町下甲の畠の畔で見かけたものですがこの付近は近年の農地整備で多くの五輪塔が出てきたということで、近くの向陽寺にまとめて置いてありました。写真20がそれです。

この他、西伯郡中山町下市に写真21のような五輪塔が畠の辺にみられました。また、日野郡江府町助沢には山

の裾に写真22の五輪塔

が在りました。時代は

江戸時代になりますが、

倉吉市大蓮寺には写真

23のような塔形の変っ

たるものみられます。

註1 「五輪塔の起

原」——五輪塔の早期

形式に関する研究論文

集—— 蔡田嘉一郎編

著 総芸舎

『宝篋印塔の

起原・続五輪塔の起原』

蔡田嘉一郎編著 総

芸舎

註2 「五輪塔の起

原」「五輪塔の成形期

に関する一知見」 黒

田昇義

註3 「石造美術入

門」——歴史と鑑賞—

川勝政太郎著

註4 「日本石材工

芸史」 川勝政太郎著



写真19 下甲五輪塔



写真20 向陽寺五輪塔群

綜芸舍

「新版仏教考
古学講座」 塔・塔婆

第3巻 雄山閣

註5 「鳥取県の石
造美術」 小谷仲男

註6 註4 参照

註7 「普正寺」

石川考古学研究会 昭

和45年9月

註8 註5と同じ

註9 註5と同じ



写真21 下市五輪塔



写真22 助沢五輪塔



写真23 大蓮寺五輪塔

長瀬高浜遺跡で出土した五輪塔は、明確な時期を判明できなかつたし、製作者についても何ら推定できなかつた。が、幕末に活躍した石工の存在を知り、彼を研究されている富長源十郎氏の論を掲げることにより、五輪塔研究の1つの研究方向を探求したい。

第2節 幕末における名和公顯彰碑と伯耆国野方の石工について

富長 源十郎

寛永9年（1632）池田光仲は、因幡・伯耆32万5千石の領主として岡山から多数の家臣を伴って鳥取へ移ってきたが、その藩士の中に大庭友尚という武士がいた。

友尚は、元和元年（1615）の生まれで、少年時代は藩主光仲の小姓として主君の側近く仕えていたが、長ずるに及んで藩内の地方勤務を命ぜられていた。

池田光仲が鳥取に移ってきてから30年ほどたった寛文元年（1661）の秋のことである。大庭友尚は、たまたま職務上の用事をおびて宍粟地方を巡歴していたが、伯耆國宍粟郡名和庄の坪田村まで来た時、ふと古びた小さな祠を見つけたので、案内している村役人に「この祠の御祭神は誰れであるか……」と聞いたところ、村役人は「実は、私もよく存じません」というので「それならばこの祠に仕えている神主を連れて来い」と言って神主を呼んで聞いてみると、どうも言を左右にしてはっきりした返事をしない。

このころの日本は、徳川幕府が鎖国をしてキリスト教徒を追害していたから各藩とも隠れキリシタンを必死で探しており、宗教統制や宗門改めが強化徹底されている最中であった。だからこれを聞いた友尚は、どうも神主の返事がおかしい。これは何かわけがありそうだなどと思い「神社の神主たるもののが、自分が奉仕している神社に誰れが祭ってあるか知らぬということがあるものか。本当に知らないというなら、お前は神主の資格がないから、ただちに神主をやめさせて追放処分にしてやる。」と言って怒りつけたところ、神主は大いに恐れ入って「神主をやめさせられて追放されてしまったんではもともこもありませんから本当のことを申し上げましょう。実は御祭神を知らないわけではありません。氏殿権現と申しますのは、何を隠しましょう、名和長年公をお祀りした神社でございます。しかしながら、世が足利氏の天下が長く続きましたので、名和長年公を祠っているということは世を憚ることでありますから、代々秘密にされこそりと祭ってきたものであります。

神職の我が家におきましても、御祭神につきましては1子相伝の継承でびしく他言を禁じられており、家族のものにさえ洩らしてはいけないと言い伝えられて参りました。だから御祭神の名を申し上げなければ神主をやめさせると言われますので、やむなく申し上げる決心をしたわけであります。」と言ったので、これを聞いた大庭友尚は大いに驚いて、鳥取に帰って直ちに藩主光仲にこのことを報告すると、これを聞いた光仲は「それは大変なものを見出してきた。名和長年といえば、楠木正成と並んで世に名高い建武の忠臣である。

かねてから、我が領内の何処かに名和長年を祭る神社を造営しようと思っていたところであるのに、我が領内にそのようなものが存在していたというのは、まことに幸なことである。お前が責任者となって、一刻も早くその祠を立派に修復して顕彰するようにしなさい。」と言った。

そこで、大窪友尚は、名和館跡にあった祠を延宝5年（1677）館跡の東隣の日吉坂の山王権現の社地に新社殿を建立してこれを移して氏殿権現と称したのが今日の氏殿神社（明治6年）であり、後の別格官幣社名和神社のもとの神社である。

この後、大窪友尚は、同社の神像が甚だしく損傷しているのを憂いて、自ら一軒の神像を刻して貞享3年（1686）に「伯耆州氏殿権現祠堂興造記」を代表させて奉納したのである。

続いて藩主光仲の命で神社の境内に、名和長年顕彰碑を建てる事になったので、さきに「氏殿権現造記」を代作した福住道祐の門人で、水戸家の儒臣をしている森尚謙に碑文を依頼し、元禄3年（1690）8月に碑文の完成をみたが、時すでに遅く大窪友尚は元禄元年（1688）に没し、続いて藩主光仲も元禄3年（1690）6月に没したために、ついに建碑のことは沙汰止みとなり、森尚謙の作った碑文は大窪家に長く秘蔵されることになった。

一方、明暦の頃（1650年代）水戸の徳川光圀は大日本史の編纂を始めて、各地で南朝の史料や遺跡を尋ねて回るし、また江戸においては大平記読みというものが流行して、楠木正成・名和長年の合戦の模様などをおもしろおかしく読みたてられ、講談の源流をなすほどに流行していったから、ようやく南朝ブームがまきおこってきた。

こうしたおりもあり、徳川光圀は元禄5年（1692）神戸渋川に楠木正成の顕彰碑を立てることを思いたら、碑面には自ら筆をとって「嗚呼忠臣楠氏之墓」と刻し、陰記には当時、水戸藩に亡命していた明国の有名な儒学者朱舜水に文を作らせ、書は先に名和長年顕彰碑を書いた水戸藩の森尚謙に書かせて、大いに勤王思想をあおりたてていった。

鳥取藩においては元禄以後、藩主池田治道によって天保6年に名和氏旧宅跡に「名和神君碑」が建てられた他はさしたる動きはなかったが、幕末になって勤皇で名高い水戸の徳川斉昭の三男で15代将軍徳川慶喜の兄弟慶徳が鳥取藩主として鳥取に入るや、藩内では勤王思想が盛り上がり再び名和長年顕彰碑建立の話が持ち出されてきた。そして安政5年（1858）9月、鳥取藩士正塙薫が藩命を帯びて名和の地に来たり、御来屋の富長屋という旅館に滞在して建碑の準備を進めることとなった。

碑の表面には藩主池田慶徳自筆の書「故伯耆守名和君碑」の八字を隸書にし、裏側には元禄3年8月に水戸藩の儒臣森尚謙の書いたものを大窪家から出してきてこれを使うとした。元禄に書いたものが、160年後の安政5年になってやっと日の目を見たのである。場所は氏殿権現の境内に本殿に並んで建てる事となったが、正塙薫は碑石彫刻について、

鳥取藩産物方中野良助に相談したところ、早速野方村（現在の東伯郡東郷町大字野方）の佐々木長右衛門という石工を差し向けてくれた。この長右衛門は何事につけてもよく気のきく男で、建碑のことについては何くれとなく相談にのってくれ、碑石も長右衛門の鑑定で久米郡倉吉の三明寺村向山という所から切り出し形のごとく仕事を進めた。

この石は、堅密潤沢にして最も美材であったから、四面を磨きたてるとあたかも鏡のごとくなつたが、100年後の昭和35年4月10日に名和神社遷座祭が行われた時寄附者の芳名碑を刻んだ石工達は、これを見て「石質・鑑定・外觀ともに非常に優れている。鳥取県下に碑は多いけれども、これに優るものは他にあるまい。」と言って折紙をつけたということである。

碑の大きさは、高さ4尺1寸8分、横1尺6寸5分、厚さ1尺2寸8分、上台高さ1尺8寸、横3尺、厚さ2尺9寸、下台高さ3尺上広5尺1寸、下広6尺2寸、厚さ4尺9寸、そして、碑の正面には池田慶徳自筆になる「故伯耆守名和君碑」を記し、碑の側面には碑文の謂を二宮元勲が記している。（下記漢文）

これを書いた二宮元勲は、元勲とも元助とも書く。文武両道に秀れ鳥取藩主池田斉稷・斉訓・慶行・慶栄・慶徳に歴仕し、



写真24 故伯耆守名和君碑（表）

臣二宮元勲再拜	之記	於其側固辭不得命謹	墳墓撰大経氏所屬者而題其陰又使元勲記其事	建碑因隸識於其面使正	森氏所親者藏右千大	氏作碑文而其碑不果建	修君祠廟請水落儀臣森	元様中大謀友尚奉命
---------	----	-----------	----------------------	------------	-----------	------------	------------	-----------

氏殿権現碑を建てた正増薰はその門人である。元勲の息子卓之丞は京都本國寺において22士に襲殺されたので、元勲は仲間とともに74才の老令の身をもって出雲手結浦で20士を討つて見事息子の仇討をしたことは名高い。

碑の裏面の陰記は、元禄に水戸の森尚謙が作った碑文であるが以下全文を記すと次の通りである。

故伯耆守名和君碑陰記 水戸侯臣森尚謙撰并書

自古忠臣義士殉節善死者必建祠祭之且暮政教使
民有勇且知方歲時奉祀教士見危而致命被張許善
死於唐文謝殉節於宋皆享廟食非以崇後設教乎
故伯耆守名和公源朝臣詳長年者伯州名和莊人也
丁於元弘之多難迎 後醍醐帝於給上遂奉 爰與

恢復京師其忠義不取古賢播竹帛所垂可以概見焉
不幸而遇延元之力戰沒于敵中嗚呼雖墮形骸於一
時而傳名節於百世凜然士氣誠可令懦夫知立志矣
今名和莊氏殿神祠此其黨也近年 大守羽林田

公擇地移祠娶田附之臣大庭友尚奉其事且竭力於

興造祠及成像及設定是祭是饗其詳見于福住道祐

所錄友尚請尚謙為記我水戸相公萬崇南朝與名和

公同志於千載之後尚謙事其家豈所敢辞乎又從而
贊之以辭

船上迎駕 佐命忠臣大官力戰取義成仁

凌霜氣節貫日精神氏殿旧蹟威德惟新

元禄三年八月日 安政五年五月日

因補伯耆國主從四位上行左近衛權少將源朝
臣慶徳之

以上のように名和長年の顕彰碑を建てたのは安政5年ではあるが、その碑文が元禄3年水戸藩士森尚謙の撰并書であってみれば元禄5年、水戸の徳川光圀が神戸湊川に楠木正成のために建碑した「鳴呼忠臣楠氏之墓」よりも2年も前のことであり、しかも同じ森尚謙の筆であってみれば名和長年の碑文は、南朝忠臣の顕彰碑としては湊川神社のものよりも古いものであるということが出来る。

そして、この碑文を刻んだものが伯耆国野方村（現東伯郡東郷町野方）の佐々木長右衛門なのであり、その石材の出所は倉吉市天神川に近い三明寺村である。

正塙薰は、建碑をすすめるかたわらこの地方の後醍醐天皇ならびに名和長年に関する遺跡、伝説を調査・記録して回ったのであるが、このことは正塙薰の息子佐伯元吉が大正元年に出版した「船上山遺事」に詳しい。

正塙薰が企画して野方の佐々木長右衛門が刻した石碑は、氏殿神社の碑の他に名和町地内には元弘帝著船處、氏殿權現道碑（2基）などがあるが以下これらについて記す。

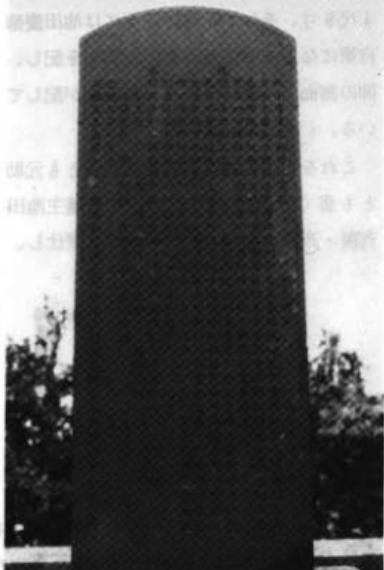


写真25 故伯耆守名和君碑（裏）

『元弘帝着船處碑』

後醍醐天皇の御着船所について、名和家所蔵の「伯耆巻」に大阪という所に着いたとあり、古くから御来屋海岸には「お腰掛台」「塘」「住吉神社」その他多くの伝説があり、特に長者原の台地上を通る旧山陰道から海岸へ下った場所を「大阪」といっているが、正岡薰は安政5年に御腰岩の前の「塘」廊前に『元弘帝着船處碑』を建てた。

因幡正岡薰題並書	也	戸屋古跡塘相伝帝所賜	千伯之名和港此地有戸	自隨岐國港幸御舟初達	奉一湾寒月落李軒	舟奉至尊欲向水汎問往	海風捲地威氣も誰取秦
安政五年戊午冬十月			屋助右衛門者是其處也		帝		

伝説によれば、後醍醐天皇が御来屋海岸にお着船になり真先に天皇を白宅に迎え入れたのが塘氏の先祖であるが、天皇をお迎えして玉座を作るに際して新しい藁を敷いてお迎えしたのでこれを見た天皇は、「まるで鶏のねぐらのようだ。」と言われたことから「塘」姓を名乗るようになったと言われ、碑文は正岡薰の書いたもので、刻んだ石工は佐々木長右衛門に違いないが、石工の名は残されていない。

ところが、この碑は明治19年3月に御来屋大火があり、その際に剥落して文字が読みとれなくなつたことから、明治39年10月当方の有志が相謀って建てなおした。だから現在のものは安政5年当時のものではないが、碑文の内容は当時のものを原本でとったものを写して使っている。

『氏殿権現道標』

古代山陰道は現在の名和町東坪、三軒屋、長者原の三人五輪前から坪出の名和館附近を経て山沿いに西下していた。

したがって、中世になっても名和館は山陰道の咽喉部をおさえた要害の地にあったが、近世になると、山陰道は三軒家から分かれて次第に海岸近くを通るようになり、古代山陰道は廃道のごとくなつた。

江戸時代末期になって、正岡薰が碑を建てる頃になると、氏殿権現は山陰道から離れて人里離れた淋しい場所になってしまったと思われる。

そこで正岡薰は、せっかくの氏殿神社も「名和君碑」も人が参拝してくれなければ意義がないところから、山陰道三軒家の分歧点に「氏殿権現道」の道標を石で建てたのである。

氏殿權道左
 名和旧跡道
 右米子往来道
 (裏)
 安政五年歲年冬
 十月吉日 御國
 御用係河村郡野
 方邑 長右衛門



写真26 氏殿權現道

また一方、海岸沿いに発達した御来屋の街並みを通り抜けた山陰道は、海岸沿いに名和川を渡って富長部落に至るが、その途中で名和川沿いに南下して氏殿神社に行くため、御来屋の西はずれに同じような道標を建てた。ところが、この道標は現在岡本氏の墓地に多数の墓石とともに集められている中に入ってしまってなかなか出せなくそのままになっているが、道標は三軒家のものと同じもので長右衛門の作ったものである。

そして、時代は移って百年以上たった昭和40年代になると名和町では町誌の編さん事業が行われたが、町誌編さんをきっかけとして名和長年研究も盛んとなり、旧奈和出身の地質学者木町鶴永氏はこの石工長右衛門に大きな関心をもち、道標に刻み込まれた「御国産御用係河村郡野方村長右衛門」の刻文をたよりに河村郡野方村に佐々木長右衛門の墓を探しに行った。

この時、木町鶴永氏を乗用車に乗せて同行したのが当時の名和町教育委員会の次長だった杉原俊憲氏であり、木町・杉原両氏は長右衛門を尋ねて前後2回野方村を訪れた。

両氏の話によると野方村には現在佐々木姓は7戸あったが、これらはいずれも長右衛門の子孫ではなく村の古老数名に尋ねてまわったが皆目見当がつかず、とうとう2人は野方の隣部落の方地（ほうじ）にある覺善寺を訪れて過去帳を見せてもらうこととした。

覺善寺の過去帳を入念に調べた結果、長右衛門の名は遂に見当らなかったけれども「明治5年11月11日妙雄野方村長右衛門妻勇」という記録を見い出したが、それ以上のことはわからなかったということである。

住職の話によると、こうした書き方をした過去帳は、長右衛門はもうすでになくなつたと解釋すべきだろうということであるから、長右衛門は安政5年から明治5年までの16年の間にすでに亡くなつたことになるだろうと想像されるが、長右衛門の墓は果たして何

処にあるだろうか、今もってわからない。立のうる根筋の根筋分野主藤田和喜典、試て兩

佐々木長右衛門の墓を探し続けた名和町の木町鶴永氏は、名和町誌の「地質」の原稿を残したまま町誌の完成を見ないうちにこの世を去ってしまったが、今を去る110余年前の幕末において正岡子規を介して今日の東郷町と名和町との間に、こうした文化の交流があったことを記し、木町鶴永氏の御冥福を祈りながら筆を擱く。此後はこの御冥福を記念して毎年1月12日を御開帳日とする。



第3節 鳥取県の弥生時代前期の遺跡とその立地について

清水 真一

(1) はじめに

長瀬高浜遺跡の緊急調査地区出土の土器の中で、弥生時代前期の土器が少量出土しました。位置的には遺跡の南側低地にあたり、おそらく下層には弥生～古墳時代の水田があつたものと考えられます。さて、この地区で出土した前期弥生土器は遺物の項で述べましたが、遺跡全体でみれば多量の前期弥生土器が出土しており、北側の昭和54年度調査区では竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土壙墓1基が、昭和55年度調査区では土壙・木棺墓45基が検出されています。またこの地区では昭和53年度に壺・甕を合わせて11件の土器棺が1基出土し、副葬品として41個の碧玉製管玉が入っていました。これらの遺構は、長瀬高浜に確実に弥生時代前期の村落が営まれていたことを証明し、数少ない山陰の弥生時代前期の遺跡の中では大規模な遺跡の一つに数えられるでしょう。

(2) 県下の弥生時代前期の遺跡

県下の弥生時代前期の遺跡の主なものを上げると第2表のようになります。

番号	遺跡名	所在地	立地型	番号	遺跡名	所在地	立地型
1	青島遺跡	鳥取市	A	9	長瀬高浜遺跡	羽合町	C
2	布勢遺跡	鳥取市	A	10	上野遺跡	大山町	B
3	三浦(湖山)遺跡	鳥取市	A	11	目久美遺跡	米子市	A
4	岩吉遺跡	鳥取市	A	12	勝田町遺跡	米子市	C
5	新袋川遺跡	鳥取市	A	13	寺内遺跡	会見町	A
6	身干山遺跡	鳥取市	C	14	諸木遺跡	会見町	B
7	松ヶ坪遺跡	倉吉市	A	15	北灘遺跡	境港市	C
8	大谷第1遺跡	大栄町	B		文献は註1～15を参照		

第2表 鳥取県の主な弥生時代前期の遺跡地名表

この遺跡の立地を大きく3つに分類します。低地もしくは低地に近い微高地をA型、平地であるが標高が高いものをB型、現在砂丘地になっている海岸部のものをC型とします。A型は8ヶ所、B型は3ヶ所、C型は4ヶ所となります。また上記の遺跡の中で遺構をともなうものは、9—長瀬高浜、10—上野、11—目久美、14—諸木遺跡の4ヶ所程度で、あとは土器片を採集した程度の遺跡です。

この遺構をともなう遺跡について、もう少しきわしくみてみましょう。

1. 長瀬高浜遺跡(9) 上記したように砂丘地に立地する。弥生時代の地形では砂丘活動が認められず、当時は河川デルタ地帯に隣接する微高地状を呈し、A型に近い地形だったとみられる。北に日本海、南に東郷池をもつ古砂丘上に立地しており、旧天神川の形成

した三角洲平野の北端部にあたる。現在検出されている遺構は竪穴住居1、掘立柱建物1、土壙・土壙墓46、土器棺墓1を数える。

2. 上野遺跡(10) 西伯郡大山町所子字上野にあり、小字ハゼ畠・河原畠を中心に土器が散在している。大山から日本海に流れ下る阿弥陀川が形成した扇状地形のほぼ中央部に位置する。阿弥陀川の流れは常に変化しており、当時の地形の復元は困難をきわめるが、扇状地形を流れる河川の形成した微高地（古河岸段丘もしくは自然堤防）とみられる。昭和13年、55年の2度の発掘調査が行われたが、顯著な遺構はみられなかった。しかし昭和27年には完形土器が数個体並んで出土しており、竪穴住居もしくは土壙墓のあった可能性が強い。昭和40年代までは山陰弥生土器編年によれば使用された土器群であるが、セット関係の不明さから形態的な編年資料でしかない。上野I式と称されたものの中に少量ではあるが削り出し凸帯状のものがみられるものの、腹部外面の施文には貝殻腹縁が使用されており、弥生時代前期中葉の新しい段階から始まるもののその中心は前期後葉にあるといえよう。中期前半段階の土器も多いところから長瀬高浜より新しい時期に位置づけられる。

3. 目久美遺跡(11) 米子市目久美にあり、米子駅南側の低丘陵が水田に接する付近を中心に土器が散在している。遺跡の中心を流れる新加茂川の改修工事等で昭和9年に土器・石器が採集されており、昭和28~29年にかけて佐々木古代文化研究室の手で調査が行なわれた。杉の矢板、杭列等や有孔上器底部、球状耳飾、玉隨塊等が出土しており、調査者は竪穴住居の遺構を想定している。発表された土器の資料からすれば貼り付け凸帯をもつものがあり、弥生時代前期の新しい段階から始まると考えられる。

4. 諸木遺跡(14) 西伯郡会見町諸木にあり、青木遺跡・福市遺跡のある米子平野南側の長者ヶ原台地の南西部に位置し、西へ低く水田面に下る小丘陵台地上にある。^(註16) 検出された遺構は幅1m、深さ1mのV字溝で、約100mの長さにわたり掘られていた。V字溝周辺はブルドーザーで削平されており、竪穴住居等の遺構の存在は不明である。宅地造成の際に地元研究者の岡田竜平・善治氏らの努力で発見され、その後町教委が緊急調査を実施したもの詳細は不明である。弥生時代前期の環濠の可能性が考えられる。^(註17) 昭和55年、遺跡の南西約1kmに位置する同様の小丘陵台地状にある宮尾遺跡でも、^(註18) 弥生時代中期初頭とみられるV字溝が掘られ、環濠集落の一部分かと考えられる要素が多く持つ点、諸木遺跡の全長100mものV字溝も同様の性格を持つと考えられる。会見町北側の低丘陵地は、山陰で他に見られない弥生時代前~中期にかけての特異な集落群があった可能性をもつ地域である。諸木遺跡は弥生土器前期の後葉の土器を出土している。

このようにみると、現在のところ鳥取県下で弥生時代前期の土器を出す主な遺跡は、東部では小規模なものが多く、中部では天神川下流の長瀬高浜遺跡、西部では大山北側扇状地、日野川下流域にみられます。そして、それらは現在の水田面、もしくはそれよりやや

高い地形に作られていることがわかります。それはもちろん前期弥生文化が稻作農耕をともなってきたからであり、当然水田（湿田と考えられます）に近い場所に集落が作られたものとみられます。ただ諸木遺跡のみは南西側の中期初頭の宮尾遺跡とともに北九州的な環濠集落を作ったとみられ、縄文社会もしくはその延長上に稻作農耕社会という異質の文化が入ってきた時の緊張を意味するものかとも考えられます。

さて、長瀬高浜遺跡出土の弥生時代前期の土器群は質量ともに豊富ですが、その中でどのような時期のものがあるかを考えてみたいと思います。「長瀬高浜調査だより-12」^(註1)で特集した前期弥生土器の中には段状整形のもの、削り出して段をつけるものがあり、これらの土器にともなってヘラ描きの木葉文、重弧文、羽状文、斜格子文、重圓状文等があります。このセット関係をみると畿内の弥生前期土器の古～中段階でみられるセット関係に一致し、総体的には弥生時代前期中段階の土器群とみることができます。また初期農耕文化に伴う石器類をみると、磨製石鎌が1点出土しているのをはじめ、磨製石斧類（抉入柱状・扁平片刃・小形柱状片刃・蛤刃等）が10点近くあります。となると上記した4つの遺跡の中では、弥生時代前期の1番古い時期から開始された遺跡といえます。県下の他の少量遺物を出土した遺跡もこの時期まで上るものはなく、鳥取県下で最初に弥生人が住みついた遺跡であるといえるでしょう。

（3）山陰の砂丘地遺跡

では次に長瀬高浜遺跡の立地している砂丘地、つまり分類したC型の遺跡についてもう少し視野を広げてみましょう。県下ではC型は身干山、勝田町（人切り場）、北灘遺跡があります。ともに詳細は不明ながら、身干山遺跡では前期中葉、勝田町遺跡では前期後葉の土器が出土しています。島根県ではどうかといいますと、出雲最大の出雲市から大社町にかけての浜山砂丘の東に位置する原山遺跡が有名です。^(註19)段を残す弥生前期土器をもち、ヘラ描き木葉文や羽状文等の文様が出土しています。原山遺跡の南東側は、出雲國風土記によれば「神門水海」と呼ばれる現在の多伎町から大社町・出雲市域にまたがる大潟湖（ラグーン）であったらしいです。今、神西湖と呼ばれる小潟湖がその痕跡でしょう。すると、長瀬高浜遺跡と東郷池との関係に非常に似ています。出土土器は、村上勇・川原和人によれば板付I式まで上るとあり、弥生土器前期前葉の時期と考えられます。また近年北九州地方で多く出土しはじめた朝鮮半島南部の稻作文化に伴う無文土器と考えられる甕の小片が両遺跡から出土しています。島根半島北側の砂丘地の古浦遺跡も、原山遺跡と同じく板付I式期まで上ると考えられる遺跡です。石見でも益田市松ヶ丘遺跡、^(註20)仁摩町坂灘遺跡などの砂丘上の遺跡から前期弥生土器の比較的古式のものが出ており、山陰海岸沿いのそれも砂丘地に古い弥生時代前期の集落が点在したとみられます。このことは、長瀬高浜遺跡でみられるように当時の砂丘地が比較的安定していたこと、もう一つは

縄文時代晩期の採集経済生活の状態にあった縄文人が、採集生活に不適であったこれらの立地（つまり水稻農耕に適した湿地とその付近の微高地・小台地）に、新たに進出してきた弥生人が住みついて行ったものと考えられるところです。

(4) まとめ

これらのことから、山陰で最初に農耕文化が伝わったのは、北九州の稻作文化を持った弥生人が陸路日本海岸を東上したというよりは、海路を使い海岸沿いのC型地（現在は砂丘地だが当地は湿地に面した微高地）の何ヶ所かに上陸したという考え方方が妥当と思われます。長瀬高浜遺跡の調査はこのことを実証したと言っても言いすぎではないと思われますし、今後県下にある日本最大の鳥取大砂丘（浜坂・福部砂丘）でもこの時期の遺跡が必ず出てくると考えられます。また丹後地方・但馬地方でも同様のことが言えるでしょう。おそらく、これらの海岸部微高地の弥生時代前期前半代の村落を基地もしくは母村落として、河川づたいに内陸部へ進出していったと考えることができるでしょう。

註1. 『鳥取県史』1 原始・古代編 鳥取県 1972

註2. 註1と同じ

註3. 田中秀明氏採集 氏より教授をうけた

註4. 『岩吉遺跡』岩吉遺跡調査団 1976

註5. 『さんいん古代史の周辺』〈上〉 山陰中央新報社 1978

註6. 久保義二朗氏より教授をうけた

註7. 註5と同じ

註8. 『大栄地域遺跡群分布調査報告書Ⅲ』 大栄町教育委員会 1979

註9. 長瀬高浜遺跡については次のような文献がある。

『長瀬高浜遺跡』I～III、『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』I 鳥取県教育文化財団 1978～1980

『長瀬高浜だより』1～24 長瀬高浜遺跡調査事務所 1979～1981

『鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡』 考古学ジャーナル181号 1980

註10. 『山陰弥生式土器の研究(1)』 考古学雑誌48巻2号 倉光清六・藤田等

註11. 『目久美』 佐々木古代文化研究室記録第1 1955

註12. 『鳥取県遺跡地図』 鳥取県教育委員会 筆者実見

註13. 『西伯耆の低湿地・縄文遺跡』 第7回山陰考古学研究集会 岡田善治 1979

註14. 『諸木遺跡発掘調査概報』 会見町教育委員会 1975

註15. 註1と同じ

註16. 青木遺跡については次のような報告がある。

『青木遺跡発掘調査報告書』I～III 青木遺跡発掘調査団 1975～1978

『青木遺跡市道予定地発掘調査概報』 米子市教育委員会 1974

『青木遺跡H地区遺構確認調査概報』 米子市教育委員会 1978

註17. 『福市遺跡』 米子市教育委員会 1968

『福市遺跡の研究』 山陰考古学研究所 1969

註18. 『宮尾遺跡現地説明会パンフレット』 会見町教育委員会 1980

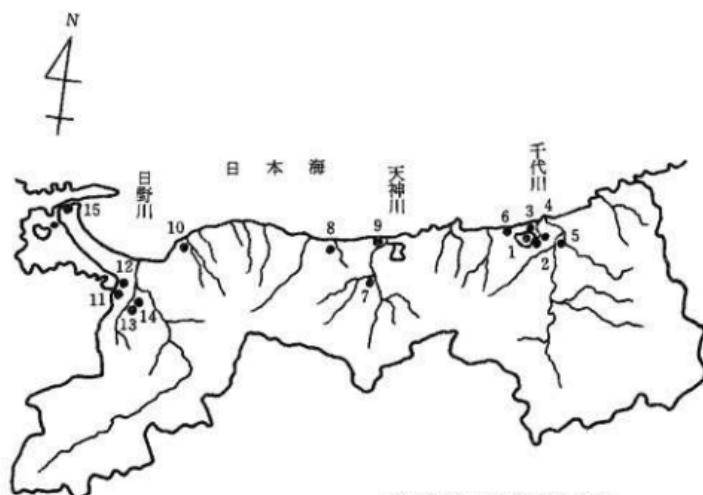
註19. 『島根県立博物館調査報告』 第2冊 村上勇・川原和人 1979

註20. 註5と同じ

註21. 註5と同じ

註22. 註5と同じ

註23. 「前期弥生文化の伝播について」『櫻原考古学研究所論集』 中井一夫 1975



挿図37 鳥取県下の主な弥生時代前期の遺跡

第4節 長瀬高浜遺跡出土の紡錘車

西村 彩滋

長瀬高浜遺跡には、布などの繊維製品の出土例はほとんどありませんが、1号墳の箱式石棺の副葬品の鉄刀に巻いてあった「つづらさわまき」の組紐に例があります。このような布は繊維をより合わせて糸を紡ぎ、織ったものと思われます。それらの糸は小さな円板の中央に軸棒を通した紡錘で、回転を利用して糸によりをかけたものです。円板は回転に慣性を与えるはずみ車で、紡錘車と呼んでいます。穴が未通のいわゆるコマ型土製品は紡

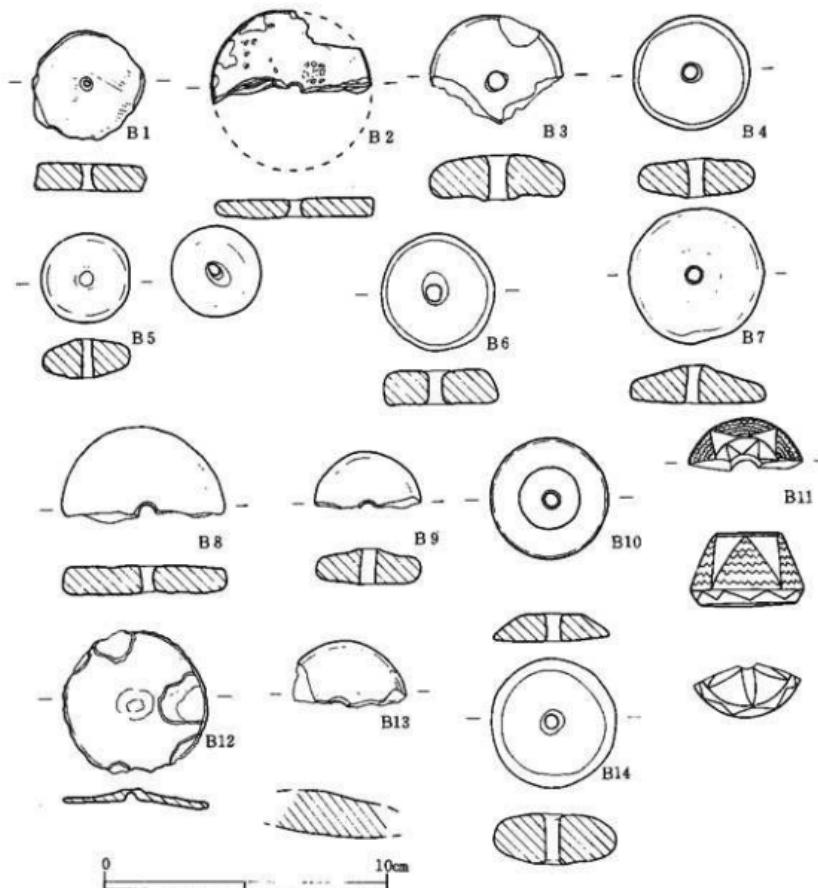


図38 長瀬高浜遺跡出土の紡錘車

錘として使用が不可能なのは、
紡錘車の範疇から一応は
です。紡錘車の形態、
材質は時代や地域によって
異なり、土製・石製・金属
製・木製、などの例がみら
れます。

当遺跡では、紡錘車は14
個出土しています。(表3参
照)この中には、きりなど
に用いるはずみ車も入って
いる可能性があります。遺

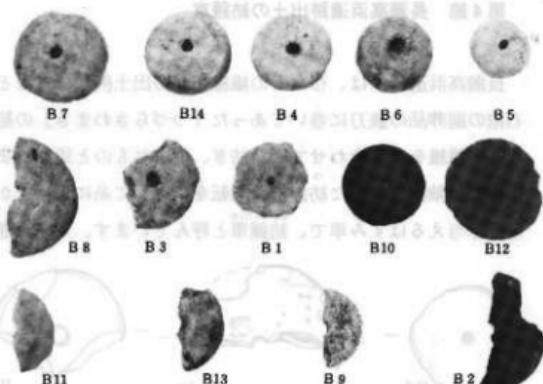


写真27 長瀬高浜遺跡出土の紡錘車

構の中から出土したのはB12とB14で土製のものです。他のほとんどは黒砂中の出土で、
土器片転用・土製円板・石製截頭円錐形・金属製などがみられます。

B1は弥生土器を転用しており、穿孔は両側から施されています。

B2は板状の節理を持った粘板岩を加工して作られたもので、両面とも磨いた跡が残っています。穿孔は両側からされ、孔の径は約5mmです。

B3は中央がややふくらんだ土製円板状で、全体に丸味を帯びています。2~5mm程度の石英、長石粒が多量に含まれています。

B4はS I-69から出土した中央がわずかにふくらんだ円板状で、孔は径5mmです。

B5は平たい算盤玉状をしており、きめ細かい胎土を用い小型のものです。

B6はB4と同じ形態のものです。

B7は上面の中央が少しふくらんだ円板状で胎土は荒く2~3mm程の石英、長石粒を多量に含みます。穿孔は焼成前です。

B8は偏平な大型の円板状をしており、穿孔は焼成前になされたものです。

B9は中央がややふくらむ小型のものでB5とほぼ同じ形態のものです。

B10は滑石製の截頭円錐形のもので、孔は両側から開けてあります。

B11は凝灰岩製の截頭円錐形のもので、上下面、側面共鋸齒文がみられ、赤色顔料が施されています。穿孔は上面からです。

B12は鉄製の円板形で軸棒は残っていませんでした。

B13は土製の円板状で中央がわずかにふくらんでいます。B3と同じような焼成で2~5mmの石英、長石粒を多量に含みます。

B14は15K地区のSK-11から出土した円板状でやや肉厚です。

B1・B2は弥生前期。B3・B13は胎土、焼成などから弥生前期のものと考えます。B4が古墳時代の住居跡、B14が古墳時代の土壙より出土したのでそれらに近いB6・B8・B13も同時代のものと考えます。B10は古墳時代中期、B11は古墳時代、B12は奈良から平安時代のものです。B5・B10は胎土焼成などから、古墳時代のものと考えます。

紡錘車の使用方法は民俗例、古文書他によると、上端がJ字状のかぎのある軸を円板に取りつけ、糸をかぎにひっかけ挿図39のようにして軸を回転させ、かぎから指でぶらさげている間の糸によりをかけます。よりがかかったら糸をかぎからはずして軸に巻きつけていくのだろうと推測します。このとき紡錘車は、はずみ車で織維の強さ、糸の太さなどに重きが関係すると考えます。

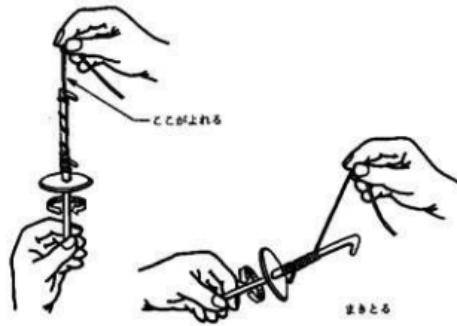
当遺跡では住居跡・土壙の出土例（それぞれ1例づつ）の他は、黒砂層（遺物包含層）中から出土です。直接遺構と関係のない所から出土しているように考えがちですが、大部分は住居跡の上層、あるいは周辺の土器群中の出土です。弥生時代前期・古墳時代前中期の住居跡が確認されていることからみてこれらの住居跡との関係が深いものと考えます。しかし、住居跡の床面近くでの検出例がない事は屋外で紡いでいたのでしょうか。

番号	形態	材質	径×厚さ(cm)	重量(g)	備考
B1	円盤形	土器転用	3.9×1.0×0.3	17.0	弥生土器の転用、1号墳尾辺
B2	〃	石製	— 0.7×0.5	—	粘板岩、1号墳北側黒砂面
B3	〃	土製	— 1.5×0.6	—	2~5mmの砂粒を含む、20E、北西区
B4	〃	〃	4.2×1.3×0.5	23.3	明褐色、SI-69
B5	算盤玉形	〃	3.2×1.4×0.4	13.2	明褐色（小型）、出土地不明
B6	円盤形	〃	4.1×1.3×0.6	23.7	明褐色、19D、石蓋土払局辺
B7	〃	〃	4.8×1.3×0.5	25.7	明褐色、20D、北西区
B8	〃	〃	— 1.0×0.5	—	明褐色、13F
B9	〃	〃	— 1.2×0.6	—	明褐色、小型（中央がふくらむ）
B10	截頭円錐形	滑石	4.2×1.0×0.4	—	濃緑色
B11	〃	凝灰石	— 2.5×0.7	—	乳白色、丹塗り、鋸齒文、緊急調査
B12	円盤形	鉄製	5.0×0.2 —	—	緊急調査、第2ベルト内
B13	〃	土製	— —	—	明褐色、20D、北西区
B14	〃	〃	4.4×1.7×0.5	34.5	褐色、中型、15K、SK-11

表3 長瀬高浜遺跡出土の紡錘車一覧表

遺跡名	質	時期	径 厚み(cm)	重さ(g)	出土状況他
1 青木遺跡	土器転用	弥生中	4.4 0.8	—	JSI-05 穫穴住居内出土
2 "	"	"	3.8 0.5	—	JSI-05 穫穴住居内出土
3 "	"	"	4.5 0.4	1.5	HS122 穫穴住居出土
4 "	鉄	藤原~奈良	4.8 0.4	—	藤原~奈良期の集落内出土
5 "	"	"	5.2 0.4	—	藤原~奈良期の集落内出土 軸も鉄製、長さ6cm以上
6 福市遺跡	土製平板	古墳前	6.00	1.5	Y29住 穫穴住居出土
7 口朝金遺跡	土器転用	縄文後~戦	5.0 0.6	2.1	会見町口朝金、C地点、繩文土器散布地
8 サキタニ遺跡	滑石・台形	古墳後	4.2 1.4	—	米子市陰田字サキタニ、散布地、鋸歯文
9 晩田遺跡	土器転用	弥生中	4.8 0.4	—	散布地に入れたトレンチ内出土
10 "	"	"	6.0 4.2 0.5	—	散布地に入れたトレンチ内出土
11 "	"	"	6.0 4.2 0.4	—	散布地に入れたトレンチ内出土
12 荘田・塚田遺跡	土器転用	"	3.0 0.5	6.5	大山町莊田字塚田散布地
13 "	"	"			
14 大山町	石 製				鉄芯
15 赤崎国主	土製円板	奈良	5.8 0.7	—	
16 津浪遺跡	凝灰質 泥岩・平板	古墳中	4.8 1.4	—	東郷町長和田字津浪 敷地 祭祠関係遺跡
17 鳥取塙ノ谷	木製・台形	古墳中	6.0 1.7	—	
18 岩吉遺跡	土器転用	弥生中	3.5 0.6	9.3	岩吉XIV-18の大型竈底から出土

表4 鳥取県下の紡錘車



挿図39 糸の紡ぎ方